

97-55

THE PILGRIM'S PROGRESS.

JOHN BUNYAN.

Translated by KOKI H. IKE.

池 亨・吉 譯
ヂ ヨ ン ・ バ ン ヤ ン 作

天路歷程

東京 基督教書類會社

明治
87 12 17
東京

目次

第一程	一頁
第二程	三九
第三程	七〇
第四程	一二五
第五程	一四〇

第六程	……………	一八九
第七程	……………	二二六
第八程	……………	二六七
第九程	……………	二七八
第十程	……………	三三八
第十一程	……………	三五五

挿畫目次

孤雲蕭々傷ましき	……………	口繪
罪惡の悲境に泣く	……………	口繪
ベッドフォードの獄中に	……………	一
パンヤン天路歷程を夢む	……………	一
人道の奥義を探りて	……………	六
基督信者聖き門に入らん	……………	六
犠牲献神の精神を悟りて	……………	七〇
初めて靈魂の自由を感ず	……………	七〇

日暮れなんとして途遠く、
 百難前に亦後に横たはる……………八九

至誠の氣凝つて向ふ處
 他宗の迫害また何かあらん……………一三七

他人の信仰を察して
 自から慢する者必ず先づ倒る……………一四一

堅忍なる祈禱の鍵
 能く懷疑絶望の城門を開く……………二六六

薄信弱行は人をして
 一生不幸に終らしむ……………二八四

死の波濤く逆捲く時にも、
 希望の光りは天の道を照らす……………三六一

天路歷程由來 並 緒言

「聞く度に珍らしければ子規、いつも初音の心地こそすれ」と云へる古歌の心に似て、ふみ見る度に珍らしければ、何時も初旅の心地すとも云ひ度きは此の天路歷程なり。此の書の不思議なること、また廣く世界に讀まれることは、凡そ聖書に次ぎて此の書ほど各國の語に翻譯せられたる者なく、また今迄に幾千万部を印刷したるか數へ難しと云ふにて知らる。且つ此の書が、見る人の心ごゝるに任せ置きて、雲井迢かに登えたる富士の高峰の如く、在らゆる人の意に適ひて、麗はし愛でたしと讀み味はゝること、彼のデヨシア、コンデルと云へる人の評に、「幼な童に取りては美しくしき繪草紙なり、智識ある人に對しては絢爛極致の劇詩なり、また學問淺き質朴なる信者に取りては、此の世を渡る旅路の案内書なり」と云へるにて極

めて明らかなるべし。此の書の作者デヨン、パンヤンが事も、亦遍
 ねく世の知るところ、されど其の傳記も最と珍らしければ、是れ亦
 接する毎に初對面の心地せらる。其の自叙の傳記にて、「充ち足れる
 恩惠」と云へる書は、讀みて益せらるゝ處頗ぶる多し、唯だ本書に
 添へて之を紹介するに餘地なきを憾みとす。

抑もデヨン、パンヤンは英國ベッドフォードの市に近きエルスト
 川と云へる村に生れたり。時は一千六百二十八年、乃はち今より二
 百七十四年前の事なり。其の系圖は極めて下賤にして詳びらかなら
 ず、父は補鑊匠を業とし、パンヤンは亦日傭工らきを事としたり。
 幼なき頃些さか學校に通ひて、貧民相應の讀み書きは習ひたる由な
 れど、程なく悪しき朋輩の仲間入りを爲して悉皆く打ち忘れたりと
 自から云へり。實に彼は悪たれ者の首魁となり果て、終には村中
 にて誰れ憎まぬ者も無き程となれり。全く彼は悪少年と成り果て

しに相違なきも、彼れは亦一風異なりたる性質を有てり。されば曾
 て或る先輩が彼れを評せし中に、「悪黨は悪黨なりしが、彼れは一種
 毛色の變はつたる惡黨にて、酒を嗜まず、色に溺れず、云々」と証
 せられしことあり。

パンヤン十七歳にして國民軍に入り、間も無くレスタアの城攻め
 ありし時、命せられて戰場に赴むく處なりしが、偶ま一人の友の己
 れに代はりて行き呉るゝ者ありしに依り、幸ひにして免かるゝこと
 を得たり。此の戦ひは實に死地に乗り入るよりも猶ほ危ふかりしな
 り、されば此の時の助けをも彼れは天恩の一とつに數へ居れり。其
 後また幾程もなく初めの妻を迎へたる由なれど年月は傳はらず。

惡に強きは善にも強し。さても村中にて我れは最も憎まるゝ者な
 りとの觀念は、我れ若し心を倭ためなば、我れは亦村中にて最も愛
 せらるゝ者と成り得べしてふ考へをも起さしめたる者の如し。兎に

も角にも彼れ自からの云ふ如く、天の「充ち足れる恩恵」に依りて、一風變りたる決心を起し、斷然惡を捨て、善に移ることを始めしかば、之れを見たる村人の驚ろき大方ならず、いづれも舌を捲きて却つて其の成り行きを危ぶみたり。されど彼れは益ます進みて其の決心を貫ぬき、遂には救主キリストを認めて立派なる信者となり、歳二十五にしてベッドフォードなるバプテスト教會に加入し、後ち亦之れが牧師となり、愈よ信仰上に幾多の經驗を得て、最も有力なる説教者となれり。されど其の信仰の進めば進むほど、猜みと妬みも周圍に起り、又迫害は到る處に彼れを待ちて、外道、魔法師、竊徑などの呼び名は雨の如く其の上降りたるなり。

其後五六年間は、其の妻が四人の小供を残して身まかりしこと、エリサベツと呼べる年若くして賢き後妻を迎へしこと、及び愈よ信仰の興義に達し、「鑄掛屋のお説教」として其の名を遠近に知られ、

盛んに福音を述べ傳へたるの外、別に記すべき事も無かりき。

越えて一千六百六十年、乃ちバンヤンが三十二歳の時に當りて、英國には王政復古の大事變あり。此は彼の英王チャールズ一世が、革命の手に其の首を奪はれ、次で水呑百姓クロムエルを首領と戴きたる共和政治も、唯だ血腥ぐさき一場の夢と過ぎて、天下は再びチャールズ二世の知らし召すべき專政の代となりたる出來事なり。此の影響を蒙りて迷惑したる者多き中に、新教乃ちプロテスタントの説教者等は最も痛く困難を感じたり。抑も舊教乃ちローマ、カトリックにては、羅馬法王を戴だきて教會の首と爲し、また英國の國教は、其の國王を仰ぎて教會の首と爲せしかば、此の間に立ちて主キリストの外に戴たくべき教會の首なしと信じたる新教の人々は、全く板挟みの姿となりて、二重の迫害を受けたる次第なり。殊に當時英國の法律には苟しくも王の命を受けざる者は公衆を集め

て説教することを得ず、と云ふ者ありしかば、パンヤンの如き狂熱なる説教者の、如何で久しく事無くして在るを得べき。やがて其の年の冬十一月に至り、サムソルと云へる村にて公然大胆に説教せる處を捕へられ、厳しく國法に問はれて遂にベッドフォードの牢獄に下されたり。是處に傷ましき囚はれの身となりて送り迎へせし春秋は、實に十二年の長き月日にて有りけるなり。

此の間最も深くパンヤンの心を傷ましめたるは、其の頼り無き家庭を顧りみるの一事なりき。織弱き妻、更に織弱き四人の子供、而も其中彼れが最愛なりし女は、憫れむべき盲目にてありしなり。此の盲目の少女は毎日に母の手に引かれて、父を其の牢屋に訪むらふを常とせり。パンヤン之れを見る毎に頰りに斷腸の思ひを爲し、嗟、主義の爲めならざらんには、如何にもして此の牢を破るべきにと嘆きたり。されど、主義は竟に彼れの枉げ能ふ處にてあらざりき。然

れば判官時に彼れに向ひて、「パンヤンよ、汝妻孥を顧りみるの親情あらば、此の牢屋をも脱し遣るべし、唯だ至尊の陛下に不敬を致して、再び説教すること無きを誓へ」と云ふを聞かば、彼れ忽ち大いなる眼を開き、「否、今日解き放たるれば、明日必らず説教せん」と云ひ張りたり。

嗚呼、天路歷程は悲風慘憺たる此の十二年間、彼の胸底に浮沈せし苦心の凝つて成りし者なり。獄中に筆を起し、獄中に稿を収む、此の幽裡の幾星霜、誰れか奥妙なる攝理の意義深く其の中に存する在るを疑はんや。彼れの晩年は寧ろ幸福なる者にてありき。出獄後十七年、乃はち一千六百八十八年八月十二日、享年六十一を以て安らかにバンヒルの墓地に眠れり。

其他の著述亦少なしとせず、然れども唯だ天路歷程の著者のみとして知られ、此の名獨り萬古に傳はらんとする者、良に以なきに非

ざるなり。されば以上の由來を心に記して、而して懇ろに此の書を繙かば、庶幾はくは其の興味一段深かるべきを思ふ。

明治三十五壬寅歲五月、相州片瀬の里にして

雨晴るゝ夕。

譯者 志るす。

天路歷程の翻譯成れる時、
之れに題すとてよめる、

譯者

世を渡る旅の曠野の明け暮れに

天つ御園の春をしぞ思ふ。



く泣に境悲の悪罪きしま傷、々蕭雲孤

天路歷程の序文
 天路歷程の序文
 天路歷程の序文

天路歷程

第 一 程

世を渡る旅のあれ野の明け暮れに
 天つみその、春をしぞ思ふ

池 亨 吉 譯
 ザ ミ ン、マ ン ヤ ン 作

浮世の曠野を渡り行きて、唯或る洞穴の邊りに休らひ、暫し身を
 横たべて眠る程に、一とつの夢を夢見でけり。我れ夢見けるに、視
 一個の人の、身には繩を纏ひたるが、大さやかなる重荷を背



む夢を程歴路天ンヤンバに中獄のドーオフドッペ

① 洞穴は十年閉居した年
 間は牢屋に居た
 めらぬ人な
 指する世に
 不義な人
 有様を云
 はひ、問
 是、問
 物、は、
 書、し

天路歷程

第一程

世を渡る旅のあれ野の明け暮れに

天つみその、春をしぞ思ふ

デ
 ヨ
 ン、
 バ
 ン
 ヤ
 ン
 作
 池
 亨
 吉
 譯

浮世の曠野を渡り行きて、唯或る洞穴の邊りに休らひ、暫し身を
 横たへて眠る程に、ひとつの夢を夢見てけり。我れ夢見けるに、視
 よ、一個の人の、身には縋縷を纏ひたるが、大きやかなる重荷を背

天路歷程 第一程



む夢を程歴路天ンヤンバに申獄のドーオフドッペ

て己が家に背く事
は、聖書に
た、知れり
厭たる世に
厭たる世に
なり。形初め
なれり。

天路歷程 第一程
負ひ、手に一卷の書物を持ち、己が家に背面きて立てるを見たり。
我れつらく、打ち眺めしに、其人やがて彼の書物を開きて之れを
讀み、且つ讀みては身を震はせ、また潜然と打ち泣きしが、さては
最ど耐へ難くなり増りて、さも悲しげなる聲を放ち、「あゝ我れ如何
にせば可からん」と叫ぶを見たり。

さても斯かる有様にて其の家に歸り行き、暫しが程は妻や小供に
も氣取られじと、強て其の悲嘆を抑へたりしが、いやつのる憂き思
ひでの黙し難く、終に其の心の程を妻や子に打ち明けて、偕て語り
出でけるやう、「あはれ我が愛ほしの妻よ、また我が懐かしの小供等
よ、我れは御身等の親しく頼りとする者なるに、さるにても身に負
ふ重荷の最と厳しくて、今は我ながら爲ん方盡きたり。且つ亦我等
住み馴れし此の城下も、天よりの火にて焼き拂はるゝ由確かに聞け
り。されば其の災難に遇はんには、我身は元より、吾が妻も吾が床

しの幼な兒も、諸共に傷ましき最後を遂げなんに、いかで助かるべ
き逃げ道もがなと求むれども、夫れさへ未だに得見出でぬなり」と
云ふを聞きて家族の者等は一と方ならず驚ろきたり。そは此の物語
りを眞實なりと信じたるにはあらで、正しく此人何事にか逆上して、
かく物狂ほしくなりたるならんと思へるなり。されば折しも夜に入
りたる事とて、急ぎ彼れを寢床に伏させ、あはれ疾く安眠して落ち
着くやうになれかしと念じ居たり。されど夜分も亦晝間の如く、い
と煩らはしかりければ、眠らん事には引きかへて、盡きせぬ涙と嘆
息に空しく其の夜を過してけり。さて翌の朝ともなりて、皆な其の
安否を尋ねし時も、彼れは益々悪しくなりたる由を告げ、又もや彼
の物語りを説き出づるに、今は妻子の心も氣むづかしくなりて、斯
かる氣違ひに優しくするは無駄なるべく、寧ろ情無く荒々しく爲て
見んものと思ひ定め、時には嘲けり、時には責め罵しり、又或る時

は全く打ち棄て、見向きもやらぬなど、さまざまと淺ましくも待遇ひけり。さるからに彼れは唯だ獨り其の部屋に引き籠りて、妻子の上を憐れみては且つ祈り、且つは自身の憂き節をも慰さめ、又は淋しき野べに漫歩るさして、或ひは祈ることをし、或ひは讀むことをし、斯くて幾日をか送りてけり。

さて或る時我れ見けるに、彼の人野べに立ち出で、常時の如く彼の書物を讀みてありしが、さて讀む程に甚く其の心に悲嘆を催はし、はては那時ぞやも爲しつるやうに、「あゝ我れ救はれん爲めに何を爲すべきか」と叫び出でたり。

我れ又た見けるに、彼の人さも遁れ去らまほしき有様にて、彼方此方と打ち眺めつゝも、猶ほ那方とも其の行方を辨まへ兼ねると覺しくて、靜かに一と所に佇立み居たり。其時我れつくづく見て在れば、傳道者と呼ばれし人出で來りて彼れに近づき、「如何なれば卿

●使徒行
卅六、卅一

●希伯來
九、二十
七、廿一
約百十六
廿二、廿一
以四結二
十二、十
以賽亞三
三十、三十

は斯く泣き叫ばるゝや」と尋ぬるを見たり。

彼の人答ふるやう、「君よ、我が身は手に持てる此の書物に依りて、己が身の一と度び死ぬることゝ、死にて審判を受くることゝに定まり居る由を思ひ悟りぬ。さり乍ら我が身は死ぬることを欲はず、亦審判を受けんことも堪へ難し」。

傳道者、「さるにても斯く斗り悪しかる事の多き世なるに、何とて卿は死に度しとも思はざるにや」。

彼の人、「そは我が背に負へる此の重荷の、我身を墓場よりも猶ほ底深く押し沈めて、はては彼の地獄とやらんに落し入れんことを恐れてなり。我身は牢屋に曳かるゝことさへ得堪へぬに、如何でか審判を受け、猶ほ其の上に刑罰をも蒙むることの堪へられ得べき。之れを考ふれば考ふるほど、身も世も在られぬ心地するなり」。

傳道者、「もし其の様の事にて在らんには、何とて斯かる處に躊躇

馬太三
ノ七

馬太七
ノ十三、
十四

詩百十
九、
五、
彼得後
ノ十九

はるゝぞや。

彼の人、「あはれ、行くべき方を知らざれば」と云ふ。

其時傳道者一個の巻物を取り出で、興へしが、其の中には「來らんとする怒りを避けよ」と記されたり。彼の人之れを讀みて、さも嬉しげに傳道者を打ち眺め、「さては那方にか避け行くべき」と云ふに、傳道者は身を回らして最と廣き野原の彼方を指し示し、「卿には彼處なる片折戸の見ゆるにや」と問ふ。彼の人、「我が身には見えぬなり」と云へば、「さらば彼處に輝やける光りは見ゆるならん」と云ふ。「さなり、其は見ゆる心地す」と答ふるに、其時傳道者言葉を繼ぎ、「其の光りを心あてに側目も振らず、一向彼方に進み行かば、やがて其の門を見るなるべし。さて其の門に到りて之れを叩きなば、卿が爲すべきことどもをも亦教へらるべし」と云へり。

かくて我れ夢の中に、彼の人の驅け出でしを見たりしが、其の家



道人の奥義を探りて基信者窄き門に入らざる

●馬六三
ノ七

●馬六七
ノ十三
十四

●馬百十
ノ百〇
十九

はるゝぞや。

彼の人、「あはれ、行くべき方を知らざれば」と云ふ。

其時傳道者一個の巻物を取り出で、興へしが、其の中には「來ら

んとする怒りを避けよ」と記されたり。彼の人之れを讀みて、さも

嬉しげに傳道者を打ち眺め、「さては那方にか避け行くべき」と云ふ

に、傳道者は身を回らして最も廣き野原の彼方を指し示し、「卿には

彼處なる片折戸の見ゆるにや」と問ふ。彼の人、「我が身には見えぬ

なり」と云へば、「さらば彼處に輝やける光りは見ゆるならん」と云

ふ。「さなり、其は見ゆる心地す」と答ふるに、其時傳道者言葉を繼

ぎ、「其の光りを心めてに側目も振らず、一向彼方に進み行かば、や

がて其の門を見るなるべし。さて其の門に到りて之れを叩きなば、

卿が爲すべきことどもをも亦教へらるべし」と云へり。

かくて我れ夢の中に、彼の人を驅け出でしを見たりしが、其の家



道人の奥義を探りて基督教者門に入る人

四ノ路加十

七九ノ創世十

を距れて未だ程遠からざるに、其の妻子は早くも之れを視どめ、大聲揚げて、歸へりてよ、思ひ止ごまりてよ、と泣き慕ひぬ。されど彼の人兩手をもて耳を掩ひ、「生命、生命、限り無き生命の爲めぞ」と叫びつゝ、後ろの方は見向きもやらず、愈よ曠野の真中さして馳せ出でたり。

隣人等も出で來りて、彼れの馳せ行く態を見てありしが、口々に或ひは嘲み笑ひ、或ひは脅嚇し罵しり、又は大聲に歸へれ返へせと呼ばりつするが中に、兩個の人俱に心を定め、力任せにして連れ歸へらんと云ひ出でたり。其の一人は名を頑固と云ひ、又一人の名は無定見と呼べり。折しも距離すでに夥だしく隔たり居りしが、此の人々何處までもと心を決して追ひ行く程に、やがて幾時もあらで追ひ着きたり。其時彼の人振り返へりて、「隣りの方々よ、何とて是處へは來らるゝぞや」と云へば、彼の兩人は口を揃へて、「されば卿

を諫め諭して伴なひ歸らん爲めに來れるなり」と云ふ。されど彼の人
 之れに答へて、「そは決して叶ふまじ」と云ひ、亦重ねて云ふやう、
 「げに卿等は滅亡の城下に住めり、我れも亦其處にて生れたる身に
 はあれど、我身は此の城下が其の名の如く滅亡することを覺りたり。
 されば卿等も斯くて在らば、遅かれ早かれ其處に死にて、さては墓
 場よりも猶ほ底深き、硫黄と火との燃ゆる處に沈み失せなん。あは
 れ、好き隣人よ、卿等も心を平らかにし、我が身と共に連れ立ち行
 かすや」。

頑固の云ふやう、「なに、妻子をも友達をも、又我等の樂しみ事を
 も、後に見捨て、去れと云はるゝか」。

基督信者云ふ、「之れ實は彼の人の名なり」「然なり、されど卿が惜
 しと思ひて棄てかぬる物も、之れを我が求めてある物に比べなば、
 實にや其の一二こぼれの値ひにも當らぬなり。まかも我が赴むく處

八、四、十、多

七、五、十

には、物皆な充ち足らひて且つ餘れり。されば卿等も我れと共に打
 連れ進みて思ひ止まること無からんには、彼處に到りて我身と共に
 等しく幸福を受くるなるべし。いざ行かん、かくて我が言葉の偽り
 ならぬを覺られよ」。

頑固、卿が世を捨て、迄も求め出でんとするなるは、全躰如何な
 る物ならん」。

基、「そは朽ちす汚れす衰へざる相傳の産業にて、天に藏められ
 ある者なり。且つ安全に貯はへられありて、定められたる機到らば、
 精神を盡して之れを求むる者どもに分ち惠まるべし。乞ふ先づ此の
 書物を読み其の趣むきを伺がひ見られよ」。

頑固、「馬鹿らしや、斯かる書物は何にかせん。兎もあれ卿は到底
 も我らと共に歸るまじきか、それとも亦歸るべしと思ふにや」。

基、「いや、我れは歸るまじ、我身は既に手を此の犁に着けたれば」。

一、六、四、希、伯來、十一

二、六、十、九

頑固、「氣違ひじみて理の解らぬも程過ぎたり。世には此の類ひの白痴者ありて、何事か思ひ付く時は、忽ち自から賢こがりて、さては智慧明かるき七個人よりも、猶ほ勝れりと思ひ僻むる者あり。無定見どの、來れ、來れ、斯かる者に取り合はんも無益なれば、いざ振り捨て、家路を急がん」。

其時無定見の云ひ出でけるやう、「げに基督教者どの、云はるゝ處面白し。まことに其の言葉どほりならんには、其慕ひ求むる物の勝れたること自然もあるべし。我が心は同道することに傾むきたり、左のみ嘲けり罵しることかは」。

頑固、「こはいかに、又しても上に上越す馬鹿者よ。かゝる逆上者の輩には如何で卿を導びき得べき。休めよ、休めよ、賢こくも思ひ止ごまりて我が云ふことに従がはれよ。いざ歸へらん、いざ返へらん」。

基、「いや頑固どの、卿も無定見どのと共に同道せられよ。彼處には先きに云ひつる如き物いと多く、其のほか愛でたかる者も少なからず。若し我が云ふ處を疑がはし、之れ此の書物を讀みて見られよ、さて此の中に書き載せられたる總ての事實は、皆な其の書主が自からの血しほに染めて證してあるなり」。

無定見、「さて頑固どのよ、我身は畧ぼ目的を定め、此の良き友に伴ひ行きて、身の運試めしを爲て見ん者と思ひ立ちたり。して、良き友よ、卿は望みの地に到るべき道すぢは能く知れりや」。

基、「されば傳道者と呼ばれし人の指圖には、此の向ふなる片折戸を目當てに急ぎ行き、彼處にて又行く先きを教そはるべしと云ふことなり」。

無定見、「さらば良き友よ、いざ出で立たん」。

斯くて兩人は打ち連れて出で立ちしが、頑固は其後ろ影を見送り

て、「あゝ斯くまでも血迷ひたる虚氣者には伴なひがたし、さらば我れは亦我が處に歸へり行かん」と吐やきたり。

さて我れ夢の中に見けるに、頑固往に去りてより、基督信者と無定見の二人は、互み交はりに打ち語らひつゝ、曠野の原を渡り行けり。

基、「いかにや無定見どの、我身は卿が同伴せらるゝ様になりたるを、最と喜こばしく思ふなり。頑固どのとても若し我身の如く、見ぬ世の末の恐ろしさ、又物凄まじき事どもを思ひ覺りたらんには、さ斗り輕はづみにも歸へり行かざりしならん」

無定見、「さても基督信者どの、今は卿と我れの兩人のみなれば、卿が云へる良き物とは如何なる者にて、如何にして受けらるゝや、且つは亦我ら今那方にか向ひ行くなる、あはれ一層委しくも語られよかし」。

基、「げに我身心中には充分に會得し居れど、言葉にては其の幾分をも云ひ述べ難し。さり乍ら卿の願ひも左る事なれば、此の書物にて其の節々を読み聞かせなん」

無定見、「卿は其の書物に在る言葉を確かに眞實なりと思ひ居らるるや」

基、「元よりなり、そも此の書物は説諭なき者の手に成りし者にて在れば」

無定見、「それは面白し、さて其の事柄は如何にぞや」

基、「何時までも亡びざる國ありて其處に住はされ、且つ末永く其の國に住むべき爲め、限りなき生命をも與へらるゝと云ふとなり」

無定見、「それは面白し、さて其の次は」

基、「榮光の冠冕と、日の如く輝やく衣裳とありて、我らに與へらるゝと云ふことなり」

約七、十
約廿九、十
以賽亞六
七、十五
提摩太
後四、十
八、二十
黙示二十

提多
二

二ノ五、馬太十三、三ノ四、三ノ五、二ノ五、八ノ七、七ノ六、六ノ四、六ノ二、六ノ一、四ノ二、四ノ一、三ノ七、三ノ六、三ノ五、三ノ四、三ノ三、三ノ二、三ノ一、二ノ七、二ノ六、二ノ五、二ノ四、二ノ三、二ノ二、二ノ一、一ノ七、一ノ六、一ノ五、一ノ四、一ノ三、一ノ二、一ノ一、十ノ七、十ノ六、十ノ五、十ノ四、十ノ三、十ノ二、十ノ一

無定見、「之れも最と心地好し、さて其の次は」。

基、「彼處には最早や悲哀もなく、又痛哭もあらざるべし、そは彼の處の主なる君、我等の目より總ての涙を拭ひ給ふべければ」。

無定見、「さて其の處にては如何なる者と交際することならん」。

基、「彼處には見る目も眩まん斗り妙へに麗はしき、セラヒムやケラビムと云ふ者住めり。亦彼處にては我等よりも先きに此の道に出で立ちたる幾千萬の人々にも邂逅ふべし。此の人々は最と淨く且つ愛情深く、一人として害悪の心なし。皆な長久に天つ御神の側近く侍んべり、また其の大前に歩む者なり。實にや、彼處にては首に金の冠冕を戴だきたる長老等をも見るべく、黄金の琴をかき鳴らす、清淨無垢の處女等をも見るなるべし。また曾て浮世に在りし時、此の大君の爲めに忠義を盡すまで、切りさいなまれ、火にて焼かれ、又は猛獸に食ひ盡され、或は海に溺らされなごせし者も、今は彼處

四ノ四、四ノ三、四ノ二、四ノ一、三ノ七、三ノ六、三ノ五、三ノ四、三ノ三、三ノ二、三ノ一、二ノ七、二ノ六、二ノ五、二ノ四、二ノ三、二ノ二、二ノ一、一ノ七、一ノ六、一ノ五、一ノ四、一ノ三、一ノ二、一ノ一、十ノ七、十ノ六、十ノ五、十ノ四、十ノ三、十ノ二、十ノ一

二ノ五、二ノ四、二ノ三、二ノ二、二ノ一、一ノ七、一ノ六、一ノ五、一ノ四、一ノ三、一ノ二、一ノ一、十ノ七、十ノ六、十ノ五、十ノ四、十ノ三、十ノ二、十ノ一

五ノ五、五ノ四、五ノ三、五ノ二、五ノ一、四ノ七、四ノ六、四ノ五、四ノ四、四ノ三、四ノ二、四ノ一、三ノ七、三ノ六、三ノ五、三ノ四、三ノ三、三ノ二、三ノ一、二ノ七、二ノ六、二ノ五、二ノ四、二ノ三、二ノ二、二ノ一、一ノ七、一ノ六、一ノ五、一ノ四、一ノ三、一ノ二、一ノ一、十ノ七、十ノ六、十ノ五、十ノ四、十ノ三、十ノ二、十ノ一

に在りて悉皆く健全に、且つ永久の生命を衣の如く着たるを見るべしとなり」。

無定見、「此は聞く斗りにてさへ人の心を動かすに足るなり。さり乍ら是等の物を我等も受け得らるゝや、また如何にして其の仲間入りを得し得るにや」。

基、「彼の國を治め給へる主の君は、此の書物の中に其の事を書き記して、我等もし眞實に之れを得んと願はば、彼れ價なしに之れを我等に與ふべしと云ひ置かるゝなり」。

無定見、「さて、我が良き友よ、嬉しくも我身は是等の事を聞かされたり。さらばいざ急ぎて行きなん」。

基、「我身は重荷を背負へるなれば、思ふ程には急ぎかねたり。さて我れ夢の中に見けるに、此の兩人かく語り了る時しも、野原の真中なる最と泥深き沼に近づきたりしが、兩人とも餘りに輕忽な

りしかば、ゆくりなくも泥濘の中に落ち入りたり。此の沼は其の名を落膽の沼と云ふなりけり。されば兩人は憂たてくも泥塗れとなりて、暫しが程は其の中に轉びつ輾びつ爲てありしが、別けても基督信者は背に重荷を負へるとして、いよ／＼泥深く沈み入りたり。其時無定見は聲を揚げ、「あゝ基督信者ごのよ、此は亦何んたる處ぞや」と云ふ。「されば、實に我身さへも知らぬなり」と基督信者の答ふるに、無定見忽ち怒りを催はし、さては言葉も荒々しく、「今の今まで幸福など、語り聞かせしは何事ぞや、また旅立の足もとより斯くも忌々しき不首尾を見るからには、行く先々の道すぢとも思ひやる。我れ再び是處を脱れて命を拾はんには、我れは全く断念なり、我れに代はりて卿一人ゆき、其の花々しき國とやらんを取るこそ宜けれ」と云ひ棄て、無二無三に身をもがき、やう／＼沼地を這ひ出で、家路の方に去り行きたり。かくて基督信者は此後も最早や彼

れを見る事あらざりけり。さる程に、基督信者は唯一人落膽の沼の中に残されしが、さりとても尙は彼の片折戸の方には近く、また我が家路には益ます遠かる彼方の岸へと志ざし、如何にしてか脱れ出でんと焦慮れども、背負ふ重荷に妨たげられて、歩みも最と抄取らざりけり。然るに我れ夢の中に、助力と云へる人出で來りて彼れに近づき、「さて卿は何とかか爲しぞ」と尋ぬるを見たり。

基督信者之れに答へて、「我身は來らんとする怒りを避けなんため、傳道者と呼ばれし人の云ひ付けを守り、此の道を斯く行きて、かの彼處なる門に到らんと、是處まで辿り來て思はずも此の沼に落ち入りたるなり」と云へば、助力は之れに向ひ、「卿は何とて其れなる踏石に目を付けざるぞや」と云ふ。基督信者また答へて、「餘りの恐怖しさに前後を忘じ、かく淺ましくも沈み入りたり」と云ふに、其時

助力進み寄りて、手を伸べよと云ふ。かくて彼れ手を伸べければ、其の人之れを引き上げて安らかなる地に立たせ、また其の道行を續くべきよし懇でろに云ひ含めたり。

其時我れ進み出で、彼の助力と云ふ人に打ち向ひ、「君よ、是處は滅亡の城下より彼處の門に往き通ふ道筋なるに、是れなる場所を修繕ひもせで、憂き旅人に多くの難儀を殘せるなるは、抑も亦如何なる故にかあらん」と尋ねけるに、其人我れに答へけるやう、「げに此の泥深き沼は、人々が己れの罪あることを認むるとき、之れに伴れて浮び出づる、あな穢なし汚らはしと思ふ心の塵芥、また其の泡沫の絶えず流れ込む處にて、別けても罪惡ある人々が自からの淺ましき境遇を思ひ覺るときは、其の心の中に多くの恐懼や疑念などの湧き出で、自づから落膽憂鬱を催ほすことなるが、それらの物も皆な流れ入りて等しく是處に滯溜ふれり。されば其の名も落膽の沼と

て、此の土地の惡しきこと此くの如く、到底も亦修復せんこと叶ひ難し。されど此の儘に殘し置かんは主なる王の好ませ給ふ處にあらす、かるが故に王の勞役者等は皆な陛下の測量師に従ひて指圖を受け、凡そ此の二千年が間、(原本一千六百餘年)此の場所の邊りに立ち働らきて、或ひは修繕の功もやあると種々力を盡せしことなり」と云ひて又言葉を繼ぎ、「さなり、我が知る處に依れば、斯かる處を善き土地に作るには之れこそ最とも良き材料なれど物識者の云ふなる、教草また手引草てふ者も、遍なく王の領分内より運び寄せられて、少なくとも二萬荷あまり、いや／＼幾百萬荷も此の中に填め立てられたることなり。されど些さかも其の甲斐なくて、矢張り見らるゝ如き落膽の沼なり。また如何ほど工夫を凝らさんにも此の後ちとても猶ほ此くて在るなるべし。然はあれども亦主宰者の指圖により、沼の真中を渡して据え置かれたる、最と堅固にして且つ良き礎

石あり。されど空かき曇り雨ふり出で、泥水夥多しく泡立つ時などには、之れを見分けんと容易からず。また左なくとも旅人の心眩み氣迷ひては踏み誤まり、折角の頼りも其の甲斐なくて、泥に塗るることもあるなり。それは兎もあれ、一と度び彼處の門に達しなば、最早や土地も善良なり」とと打ち語れり。

さて我れ夢の中に見けるに、かの無定見は此時彼れの家へ歸り着きたり。されば其隣人等訪なひ來りて、或は其の歸り來りしに依りて賢しき者なりと云ふもあり、或は基督信者ごときに伴なひ行かれて辛らき目に遇ひたるを愚かなりと誹るもあり、又或る人々等は口々に、「さて一旦斯くと思ひ立ちて行きたる者を、些さかなる難儀に遇ひたりとて忽ち之れを止めぬること、意氣地なくとも意氣地なき限りにて、我等ならば斯かる事は爲さぬなり」と嘲けり笑ひ、其の卑怯を罵する程に、無定見は最と爲ん方なくて、人々の中に

疎み居たり。されど終には稍や信用をも回復してければ、人々も談話の筋を更へ、さては只管ら基督信者を爪弾きして罵しりけり。

さる程に基督信者は獨り寂しく通り行きて、今しも唯或る十字街の處を過ぎ行かんとせしとき、迢けき曠野の彼方より、我方へと渡り來る人影を見たり。此の紳士の名は世才氏と云ひ、かの滅亡の城下に程近く、また最と大なる村里にて、肉慾の里と云ふ處に住む人なり。(さても基督信者の家出せし噂さ最と喧びすしく、其の郷里は云ふも更なり、近在所々の風聞とさへなり弘まりたる程なれば)此人は豫て薄々は聞き知り居りしが、今日のあたり出で遇ひて其の行き惱める風情を見、また其の太息や嘆きの聲など漏らし居る態より推し察りて、之は定めし基督信者なるべしと思ひ取り、やがて近寄りて言葉を交はし始めたり。

世才、「さて、脚は斯く重荷を負ひたる爲躰にて、那方に行かる

るぞや」。

基、「げに重荷を負ひたる爲躰、我身ながら淺ましき限りなり。さて亦卿には我が行く方を尋ねらるゝか、さらば、君よ、告げ進らせんに、我身は彼處なる片折戸を指して行く者なり、彼處に到らば此の重荷を取り去らるべき道あるべしと聞き知りたれば」。

世才、「卿は妻や小供を持たるゝにや」。

基、「さなり、之れを持てり。さり乍ら此れなる重荷の堪へ難ければ、前かたの如く妻子を顧りみて楽しむに違なく、宛ながら持たざるも同然なり」。

世才、「我れ卿に勸めて見度き事あれど、卿は之れを聽かるゝにや」。
基、「我身は今良き忠告を受けずば叶はざる場合とて、良き事ならば必らず聞くべし」。

世才、「さらば先づ卿に急ぎて其重荷を取り去らんことを勸むるな

り。そは其れの在る限り、卿の心も落ち着くまじく、また其れの在らん限り、神が卿に與へ給ふ總ての恩惠の賜物をも心よく味はふことを得まじければ」。

基、「そは云ふ迄も無きことにて、此の重荷の苦を脱がれたさに身を獲せど、到底も之れを取り去らんこと自からの身にては叶ひがたく、また我が郷里にても誰ありて我が肩より取りおろし得る者もなし。さればこそ卿にも告げぬるやうに、あはれ此の荷の取り去らるる事もやと、此の道を行くにてあるなれ」。

世才、「其の荷の取り去らるゝ爲めに此の道を行けよとは、そも亦誰れに云ひ含められたるにや」。

基、「されば最と敬まふべく亦非凡なる骨柄の人にて、其名は傳道者なりしと覺ゆるなり」。

世才、「あゝ憎みても餘りあり。彼れが卿を勸めて指し向けし其の

●哥林多
前七ノ二
十九

道ほど、世にも危険にして且つ難澁なる者は又と在るまじく、かくても其の勸めに従ひ行かんには、卿必らず思ひ知ること多からん。卿は既に幾等かの難儀に遇ひたるなるべく、卿の衣の泥塗れなるよりしても、かの落膽の沼に落ちたるならんと見受けらるゝなり。まかも其の沼こそ、此の道を志さず者に着き纏ふ憂き節の手始めにてあるなれ。我れは卿よりは年長なり、されば先づ我が言ふことを聞かれよ。卿が行くなる此の道には、疲勞、痛苦、飢饉、危難、また、寒苦、また劍の難、さては獅子、惡龍、闇黒、其の他在らゆる患難、一と口に云は、死と云ふ者横たはれり。是等の事は數多の例證ありて最と確かなり。斯かれば誰れか亦卿の如く、見も知らぬ者に氣を許して、さも無分別に其の身を打ち棄てんとする者あるべき。」

基、「それも實に然る事ながら、君よ、我身に取っては卿が示されし是等の物の數々よりも、此の背なる重荷の方猶ほ恐ろし。いやいや、例へ如何やうの目に遇ふとも、此の重荷をさへ脱がるゝことを得ば頓着すまじ。」

世才、「其の重荷を覺え初めたる由來は如何にや。」

基、「手に持てる此の書物を讀みてよりなり。」

世才、「さもあるべしと思ひたり。總じて心弱き人々之れを讀みては、其の身分に取りて扱ふまじき程の高尙なる事どもをも扱ふが餘り、忽ち心亂れて惑迷に落ち入ることなり。卿も夫れに相違なし、まほしからせて、狂暴なる企だてを起さしむるなり。」

基、「我身は我が得んとする物を知らざるに非ず、此の重荷より安らかに脱かれたしと云ふ其の事なり。」

世才、「さて、斯く斗り多くの危難着き纏へりと心得ながら、別

けても亦、(今暫し忍びて耳を借されよ) 我れ卿に良き方を示し、此の道にては必らず遇ふべき危難も無しに、所望の通り安穩を得させ得ることなるが、それにては卿は猶ほ此の道を續けんと爲らるゝにや、げに我が云ふ方に従ひなば、その功験立ち處にて、其上には道連れも多かるべく、且つ安全にして満足なる事いと多からん。

基、「さては、君よ、何卒その秘事を明かされよ。」

世才、「さればなり、あれなる村に、(此の村は勸善懲惡の里と呼ばる)、最と名聲高く又甚だ思慮ある人にて、其の名を徳行と云ふ君子住めり。此人は卿が負へる如き重荷をば、人々の肩より取り下ろすことに妙を得てあり。さなり、我れ彼れが此の仕方にて數多の善事を爲せしを知る。げにや亦、彼れは斯かる重荷の爲めに、聊さか取り逆上せたるものなごを醫やすに堪能なり。されば卿もし彼の家に到らんには、我が云へる如く立ち處に助けられなん。路程も是處よ

りは半里足らずなり。若し亦、此の人留守にて在らんには、彼れ一人の年若くして品好き息子を有てり。其の名は禮儀と呼ばる、此の男も(言はれ先づ)老先生に並びて耻ぢざる腕利なり。まことや彼處にて卿は重荷の苦より安めらるべし。かくて亦卿故の住家に歸り度しとも思はずば、(實は我れは卿の然か思はざるを望むなるが)、當今此の村には空屋もあり、日用品なども安價にて且つ善良なる事ゆゑ、相當なる價格にて一家を購なひ、妻や子供等を迎へ取るも宜しからん。別けても風俗温良にして偽はり少なく、正直なる人々を隣りとして住はんこと、必らず卿の生涯を益ます幸福ならしむべし。基督信者は之れを聴きて、聊さか途方に暮れたりしが、やがて亦、若し此の紳士の云ふ處眞實ならば、其の勸誘に従ふこと最とも賢き道なるべしと思ひ定めて、さて更に云ひ出でけるやう、「君よ、さらば其の正直なる人の住居には那方よりか參るべき。」

世才、「卿にはあれなる高き山の見ゆるにや」

基、「さなり、最とよく見ゆ」

世才、「さらば彼の山に沿ひて行かるべし、かくて第一着の家こそ夫れにてあるなれ」

さる程に基督信者は其の道を変へ、助けを求めて徳行君の家に向ひたりしが、今しも間近く其の山に達せしとき、こは如何に其の頂嶺いと高く、また道に對へる山腹は宛がら掩ひ傾むきて、今にも頭上に落ち懸らん斗りなるに、基督信者は怖ぢ恐れて更に一步も進み得ず、其のまゝ其處に立ち盡して、亦爲ん様をも知らでありけり。其時背負へる重荷も今までよりは一と層重き心地するに、猶ほしも山上よりは火焰の光り夥多しく閃めきて出で来る。されば基督信者は愈よ恐れ、あはれ、焼き殺さるゝことなるかと、汗も濡どに震ひ居たり。かくて世才氏の勸誘に従がひつることを、今更の如く後悔し

●出埃及
十九ノ十
八ノ十
希伯來
二十

始むる折、端なくも此方を指して近寄り来る彼の傳道者の姿を見てしかば、また我身を耻ぢて甚く赤面し、始めたり。さる程に傳道者は愈よ近く近寄り來り、さも嚴めしく亦畏ろしげなる面もちして、しげと視つめて在りしが、やがて基督信者に向ひて條理正しく責め問ひ始め、偕て云ふやう、「基督信者よ、卿は何と爲られしぞ」と之れを聞きて基督信者は何と答ふべきやすがも無く、たゞ默然として其の前に佇立みしが、其時傳道者更に言葉を繼ぎ、「さるにても卿は彼の滅亡の城下の街外れにて、大聲に哭き叫びて居たりしを、我が見出でたる其の仁ならずや」

基、「然なり、君よ、我身は彼の男にてあるなり」

傳道者、「我が卿に示したるは、彼の少やかなる片折戸の道にてはあらざりしか」

基、「師なる君よ、云はるゝ通りなり」

傳道者、「さりどては何とて斯く早くも其の道を離れ、却つて道ならぬ方には出でたるならん」。

基、「我身かの落膽の沼を渡り果て、程もあらせず、一個の紳士に出で遇ひしが、其人我身に向ひ、あれなる村里に到りなば、此の重荷を取り除け呉るゝ人あるべしと説き勧めたり」。

傳道者、「そは又如何やうの人物なりしぞや」。

基、「見たるところ紳士らしく、且つ種々に語り出で、到頭我身を説き伏せける程に、斯くは是許にも來れるなり。されど此の山を打ち仰ぎて、其の道の上に掩ひ傾むき、今にも頭上に落ち懸りぬべき様を見るにつけ、俄かに怖氣づきて立ち竦める處なり」。

傳道者、「其の紳士とやらんは卿に何と云ひけるぞや」。

基、「されば、那處より那處に行くぞと尋ねしかば、我身は事の由を打ち明けたり」。

傳道者、「其時彼れは亦何とか云ひたる」。

基、「其人我身に家族は有りやと尋ねしかば、亦之れ有る由をも告げたり。されど我身は背なる重荷の堪へ難さに、今は往時の如く妻子を願りみて楽しむことも爲し難しと云へり」。

傳道者、「されば亦其人何と云へるにや」。

基、「急ぎ此の荷を取り去れよと我身に命するにぞ、夫れこそ我が求むる處にて、夫れ故にこそ彼處なる片折戸をも志ざし、尙ほ其上にも指圖を受けて、安らかに助けを受くべき場所にも到らんとは爲るなれと語りたり。其時かの人我身に向ひ、一とつの捷徑にて、憚り乍ら、君よ、卿が我身を打ち立たせたる如き、かゝる危険もあるまじき一とつの良き道を示しやらんと云へり。また其道こそ此様の荷を取り除くるに妙を得たる、さる先生の門に導びくなれと云はれたり。さる程に、我身此人に信を置き、若しや速やかに此の重荷

より安められ得る事もやど、さては彼方の道を離れ此方へと移りてけるなり。されど此の處まで進み來て事の危ふき有様を打ち眺め、前にも云へる怖ろしさに立ち竦みて、今更ら爲ん様も知らで在るなり。

●希伯來
十五、二

其時傳道者は彼れに向ひ、「我れ暫らく神の聖言を卿に示さん、心靜かに立ち居られよ」と云ふ。されば彼れは戰のきつゝも立ち居たり。さて傳道者は言葉をつぎ、「慎しみて告ぐる所の者を拒む勿れ、もし地にて示せるものを拒みし彼等免かるゝこと無かりしならば、況して我等天より示せる者を拒みて免かるゝことを得んや、また「義人は信仰に依りて生くべし、若し退ぞかば我が靈魂之れを喜こびとせじ」と云ひ出で、其の意義を彼れの身の上に照らし合はせ、「げにも卿は此の傷ましき悲嘆に落ち入らんとする者なり。卿は至尊者の勸諭に背き、我れと我が足を平和の道より退ぞかせ、かく

●全十
三十八、

て自から勞して堙滅に淪まんと爲てけるなり」と云ふ。

●馬太
一、三十一
●約
一、二十
●七十

基督信者は之れを聞きて死せるが如く其の足もとに打ち倒れ、「あ我れ死なん、禍ひなるかな」と打ち叫ぶに、傳道者は、「人々の凡て犯す處の罪と、神を潰すことは赦されん」とまた「信せざる勿れ、信せよ」と云ひつゝ、其の手を取りて引き起せば、基督信者は稍や再び我れに返へり、先の如く傳道者の前に戰のきつゝも立ち上り。

其時傳道者は猶ほも言葉を續けて云ひ出でけるやう、「今卿に我が語り聞かす事どもを一入心して聽かれよかし。先づ我れ卿を陵のかしたるは何者にて、また彼れが何者の許に卿を送らんとしてありしかを告げ知らせん。抑も卿の會ひたる人は世才某がしどて、其の名に背かぬ世智深き人なり。此人は唯だ世俗の教理をのみ愛し、(さるからに彼れは禮拜の爲めとて常に勸善懲惡の里に行くなり) また其

の教理には十字架を負ふの面倒も無ければとて、最と篤くも之れに
 歸依し、且つは亦、其身が斯く俗めきたる性質なるより、従つて我
 が道の義しかるを猜み、求めて之れに邪魔立てせんとはするなり。
 げにや此人の説き勧めし中に、心より卿の嫌ふべき三つの事あり。
 一、卿を其の道より離れさせしこと、
 二、十字架を負ふ事を卿に忌はしく思はせんと努めしこと、
 三、死の境界に到るべき道に卿の足を向けさせしこと、
 第一に、卿は彼れが卿を其の道より離れさせしこと、亦卿自身
 も其れに心を許せしことを惡むべきなり。そは之れ世才風情の勧め
 の爲めに、神の勸諭を拒めることにて、かの『穿き門に入る爲めに
 力を盡せ』命に至る路は穿く、其の門は小さし、其の路を得るもの
 少なり』と主の云ひ給へるも、乃はち我が卿を送りたる片折戸の事
 にてありけるなり。げに此の小さき門より、また其れに到る此の道

①路加十
三ノ二十
四ノ七
馬太七ノ
十三ノ十

①馬太十
七ノ三十三
路加十
三ノ四、
六ノ二十四
七ノ二十二
五ノ二十二

より、彼の悪人は卿を誘ひ離らせて、既に滅亡の方に連れ行かんと
 は爲たりしなり。されば彼れが卿を道より離れさせしを惡み、亦自
 から其の言ふ事に従がひしを厭ふべし。

第二に、卿は彼れが卿を誘ひて十字架を負ふ事を忌はしく思はせ
 んど努めしを惡むべきなり。抑も卿はエジプトの財寶にも勝りて、
 十字架の爲めに受くる苦難を撰ぶべきに非ずや。且つ亦、榮光の王
 なる主も卿に告ぐるに、其の生命を全うせんとする者は之れを失な
 ふ、と云ひ給へるならずや。げに彼れに従がはん者にして、其の父
 母、妻子、兄弟、姉妹、また己れの生命をも憎む者に非ざれば、其
 の弟子と爲ることを得ざるなり。されば是れなくては限りなき生命
 を得能はざること明白なるに、そは患難多し、亡滅の道なりなど、
 と説き惑はさんとする人も在ることなれば、斯かる者の云ひ草をこ
 そ、卿の惡むべき者なれど我れは云ふなり。

第三に、卿は彼れが死の境界に到るべき道に卿の足を向けさせしを悪むべきなり。之れに就きては、彼れが何者の許に卿を送りたるか、又其の者が重荷を取り除くことに如何ばかり無能なるかを思ひ知るべき筈なり。

さて卿が安心を得んため其許に送られたりと云ふなるは、名を徳行君と呼べる者にて、實は奴隸なる婦人の息子なり。其の婦人は今猶ほ生きて在り、まかも其の子供等と共ども奴隸にてあるなり。亦卿が頭にや落ち懸らんと恐れたる此のシナイ山も、今猶ほ不思議に残りて在り。されど彼の婦人も亦其の子供等も奴隸の身にてあるからには、誰れか彼等に依りて自由の身と爲らるゝ事を望み得べき。げに、此の徳行なる者、卿を重荷の苦より脱かれ得させんこと思ひも寄らず、また今までに一人として其の例あること無し。否、永久までも其の事無からん。抑も律法の行爲に依りては、凡そ生ける

加拉太
四ノ二十
一、十七

加拉太
三ノ十

人一人として其の重荷より脱かるゝことを得まじければ、律法の働らきに依りて義とせられんことも叶ふべからず。されば世才氏は外道の人にて徳行君は詐僞者なり。亦其の子息禮儀とても、作り笑顔は品好けれど、其の實は僞善者にて卿を助くべき能も無し。まことや斯かる愚鈍しき人々の云ひ罵しる事の中には、卿を惑はせて我が示したる道より離らせ、斯くて卿の救ひを遮ぎらんと謀らむの外はあらざるべし」と語り了りて傳道者は天を仰ぎ、其の云ひたる事の僞りならぬを證しするさて、聲高らかに打ち呼ばれば、こはいかに忽ち山上より火焰と共に大なる聲出で來り、身の毛逆立ちて立ち竦める基督信者の頭の上に、『凡そ律法の行爲に由る者は詛はるべしそは律法の書に記されたる凡ての事を、恒に行なはざる者は詛はると録されればなり』と云へる言葉響き渡りぬ。

今は基督信者死ぬるの外途なしと思ひて、さては世才氏に出で會

ひたる其の機をさへ恨み嘆き、また百千度繰り返へしては、其の勸誘に心許せし身の愚かさを打ちかこち、亦かの紳士の説きし處、唯だ肉情のみより出でたるなるに、淺ましくも之れに打ち敗けて、斯く迄も義しき道を捨つるに至りしを甚く耻らひ、さも悲しげに聲を放ちて泣き出でたり。かくて亦傳道者に打ち向ひ、言葉を新ためて尋ねけるやう、「我身今歸へり行きて、かの片折戸の方に上るを得べきか。それとも之れが爲めに見捨てられ、且つ耻しめられて彼處より逐ひ返へさるゝ事なるや。我身は彼の人の勸誘に従がひしを悔むことなるが、さりては我が罪惡の赦さるゝこともあるまじくや。あはれ最早や頼みも有らざるにや、君よ、卿の意見は如何にぞや」と云ふに傳道者は彼れに答へて、「さても卿は此の事に依りて二つの惡事を犯したれば其の罪最も輕からず。乃ち卿は入るまじき横道に踏み入り、従つて善良なる道筋を離れたることなり。さり乍ら

彼處の門を守る人は、衆人に對ひて慈心厚き方なれば、必らず卿をも受け入るゝなるべし。さりながら、「と云ひさして亦言葉をつぎ、「恐らくは彼れ怒りを放ち、なんぢら途にて亡びん」ともあることなれば、必らず用心して、再び道より離るべからず」と云ひ諭したり。

第二程

世を渡る旅のあれ野の明け暮れに

天つみその、春をしぞ思ふ

さる程に、基督信者は愈よ元の道に立ち返へらんと支度するにぞ、傳道者も打ち微笑み、道中恙無かれかしと、いと懇ろに挨拶してけり。かくて一向行程を急ぎ、道すがら出で遇ふ人に言葉も交はさず、

また物尋ぬる人のありとても返答へもやらで、宛ながら禁断の場所に踏み入りたらん人の如く、絶えて安けき思ひも得為ざりしが、漸やくにして彼の世才氏に陵のかされて離れ行きし元の處に立ち出で、夫れより亦幾時をか経て、かの片折戸にも達してけり。さて其の門の上には、『叩けよ然らば開かるゝことを得ん』と記されたり。さるからに基督信者は、

『身は罪過のいと深けれど

たい憐れみて 入れよかし、

世々に盡きせぬ 其の御恩恵は

讃め頌へても 歌ふべし』

と云ひつゝ、數多度び打ち叩きしが、稍やありて容貌最とも沈着たる、慈心と交へる人其の門口に出で來り、『其處なるは誰れ人にて、那方より來り、また何事をか望まるゝぞ』と尋ねたり。基督信者は之れ

馬太七
二十八

に答へて、『是れなるは重荷を負ひたる愛たてき罪人なるが、來らんとする怒りより救はれん爲め、シオンの山とやらんを志ざし、滅亡の城下より出で來れり。さて其の道筋とて是れなる門を通るべき由聞き知りたるに、あはれ卿の意に叶ひなば、我身をも許し入れられよ』と云ふに、『そは最と易し、心より喜こびて入れ進らせん』とて直ちに其の門を押し開けたり。

かくて基督信者其の内に歩み入らんと爲たりしに、彼の人矢庭に彼れを捕らへて、烈しく内に引き入れたり。思ひかけざる事なれば基督信者驚ろきて、『こは亦如何なる次第ぞや』と云へば、彼の人懇ろに之れに告げて、『此の門に程近く建てられたる一個の要害堅固なる城堡あり、其の城主は悪魔の王ベルゼブルと云ふ者なるが、彼れ人々の此の門に進み來るを見れば、未だ其の門内に入らぬ間に、もし打ち取ることを得べくもやど、其の手下に下知して彼處より遠矢

を射かくるなり」と云ふ。之れを聞きて基督信者は、「あゝ危ふかりし、さりとは亦有り難かりし」と云ひつゝ、全く内に入りたり。其時彼の人重ねて尋ぬるやう、「誰が此方へは指圖したるにや」

基、「されば、傳道者と云へる人、我身に云ひ含めて、此方に来り此の門を叩くべき由聞かされしまゝ、前の如く音なひたり。また、君よ、卿こそ我身の爲すべき事共を告ぐるならめと彼の人云へり」
慈心、「げにや。視よ、我が門を汝の前に開けり、之れを閉づることを得る者なし」とあるならずや」

基、「今となりて初めて我が勞苦の空しからざりしを覺ゆるなり」
慈心、「卿は何とて唯一人來られしぞ」
基、「我が隣人等は誰れありて我身の如く其の身の危ふさを思ひ知る者も在らざりければ」
慈心、「卿の家出は誰れ人も知らざりしや」

四十三

基、「されば、最初の程は我が妻と小供等、我身を見て立ち返へりてよと慕ひ呼び、また隣りの誰れ彼れも、大聲にて呼び還へさんと叫びたりしが、我身は手にて耳を掩ひ、さながら道を續け來れり」
慈心、「さては誰れとて卿を説き伏せて連れ返へらんと、跡を追ひし者も無かりしにや」

基、「さなり、頑固及び無定見なる二人ありしが、到底も我身の伏すまじきを見て頑固の方は罵しりつゝ、歸へり去り、無定見のみ暫しが程は従ひたりしが」

慈心、「して、何とて連れ立ち果ふせざりしや」
基、「げにや落膽の沼までは、二人づれにて來りしも、ゆくりなく共々かの沼の中に落ち入りしより、連れなる無定見は忽ち力を落して斷念し、さては再び其家路に近き岸に這ひ上り、我身には彼れに代はりて唯一人ゆき、其の華々しき國をも得よと云ひ捨てつゝ、

斯くて彼れは頑固の跡を追ふて彼れの途に行き、我身は亦是れなる門を慕ひて我が道に來れるなり」。

其時慈心は之れを聞きて、「あはれ、天の榮光を價值なきものと輕しめて、其の爲めには些さかの難儀を冒すにも當らずと思ふ人あり。ばに斯かる人の淺ましきよ」と云へば、

基督信者も言葉を繼ぎ、「まことや我身は無定見の身の上を斯く打ち明けて語りしなるが、若し亦自身の在りのまゝを云はんには、彼れと我身と那方優れりとも定め難かるべし。彼れが其の家路に向ひたりしは然る事ながら、我身とても亦世才氏とやらんの俗論に説き誘はれ、道を離れて死の方に行きたることあり」。

慈心、「さて、彼の者に邂逅はれしか。なに、徳行君の黨類に卿を指し向けて、其の重荷の苦を安めしめんと爲したりとや。彼等は孰れも甚だしき詐僞者なり、えて卿は彼れが勧誘に従はれけるにや」。

基、「さなり、堪へ得るかぎり徳行氏を尋ね行きしが、其の家近く立てる高山の、我が頭の上に落ちや懸らんと思ふやうになりて、さては力盡きて其處に立ち止まれり」。

慈心、「かの山こそ數多の人の死に處にて、猶ほ彌や多くの人も滅びなん。あはれ卿が粉微塵に打ちも碎かれで、其を遁れしは仕合せなり」。

基、「かく晴れやらぬ酔せき思ひに結ばれて在りつる時、幸ひにして再び彼の傳道者に相逢ふこと無かりせば、實に我身とても如何に成り果てしや知るべからず。されど神の慈恵にて彼れ再び我が所に來りしなり、さもなからんには定めし是處に達することをも得ざりしならん。さりさては彼の山に打たれて死ぬる方廻かに相應しかるべき我身なるに、かくても今は是處に來り、我が主に向ひて斯様に語らふことをも得、なほ其の上に許されて此の門をさへ通されぬる

●約翰六
七、三十

こと、身に取りて借ても何たる恩徳なるぞや」。

慈心、「是處は誰れ人をも拒むことなく、縦し越し方には如何なる事を爲したるにもせよ、必らず捨てらるゝことは有らぬなり。さらば借て基督信者ごのよ、我れ卿に行くべき道を教へんに、暫らく此方に従がはれよ。さても向ふに見えたる細道を卿は見らるゝや、あれこそ卿の行くべき道なれ、此は先祖達、豫言者達、またキリスト、及び其の使徒達によりて開かれたる道筋にて、定規もて作りたらんも斯く迄はと見ゆる斗り眞直なり。之れ實に卿の行くべき道にてあるなり」。

基督信者は之れを聞きて、「されど亦、道馴れぬ人々の踏みも迷ふべき、曲り角や迂回れる個所なども無からずや」と云へば、慈心は打ち領づき、「まことに之れ有り、此の上には數多の横道の結び接きて在ることなるが、それらは皆な路幅廣く且つ曲れり。正

●馬太七
ノ十四

しき道は窄く且つ眞直なる外無ければ、斯くて其の正しかると悪しかるどを見別け得べし」と云ふ。

其時我れ夢の中に見けるに、基督信者は猶ほ更に言葉を進め、若しや此の人の力を藉りて彼の重荷を取り除くること叶ふまじくやと尋ね乞ひたり。そは他の助力なくては到底も取り離さんこと叶ひ難くて、今猶ほ其の背に在りければなり。

されば彼の人々に告げて、「其の重荷の事なれば左まで苦にするにも及ぶまじく、今暫しの辛抱なり、やがて其の釋放るべき地に到らんとし、自づと卿の背より落ち去るべければ」と云へり。

さる程に、基督信者は帯引きしめて再た旅立ちの支度しけるに、彼の人また之れに向ひ、「卿此の門を立ち出で、幾程をかけるか、頃ほひ、さる釋義者の住居に到るべし、かくて其の門を訪なはんには、卿必らず勝れて愛で度き事共を示さるべし」と告げ了りて、道中絶

えて無事なれと挨拶しければ、基督信者も此の仁慈ある人に暇乞ひして愈よ是處を出で立ちたり。

かくて進み行きて彼の釋義者の住居に到り、幾度か其の門を打ち叩けば、やがて一個の人其の戸口に出で來り、「其處なるは誰れ人なりや」と問ふ。基督信者之れに答へて、「こは旅の者なるが、此の家の主人の知友に云ひ含められ、身の益ともなる事共教へられん爲め訪なひ寄り。されば家主の君に對面を得まほしく」と云ひ出でけるに、彼の者さらば呼び來らんとて内に入りしが、少時ありて家の主人は出で來り、さて基督信者に打ち向ひて、「卿の望まるは何事ぞや」と尋ねたり。

其時基督信者之れに答へて、「我身はシオンの山を志ざし、滅亡の城下を出で來れる者なるが、さても此の道の入口にて、若し此方に訪ね寄らば、我が道中の心得とも成るべき勝れて愛でたき事共を示めさるべしと、かの門守る人に教へられつるなり」と云へば、

かの釋義者は、「さらば卒さ、卿の益ともなるべき事を示すべし」と云ひつゝ、僕を呼びて燭を點させ、又基督信者を請じて唯或る座敷に案内し、さて僕に命じて其の戸を開かしめたり。かくて其の戸の開きたる時、基督信者は其の壁に懸かれる最と嚴格なる人物の畫像を見たり。其の身は浮世に背向き、其の唇頭には真理の律法書き記され、手には二つと無き良き書物を持ち、其の眼は天を打ち望めり。其の態さながら立ちて人々に教を諭す者に似たり、また黄金の冠冕其の頭の上に懸れり、之れ其の畫の趣向にてありけるなり。

基督信者は之れを見て、「こは如何様の仔細ならん」と問へば、かの釋義者の云ふやう、「此の畫像なる人は、千人に一人とも云ふべき秀でし人物にて、能く兒女を設け、其の爲めに、産の劬勞を爲し、また既に生れぬれば自から之れを育て養ふなり。さて其の唇頭に

多、哥林多前、加拉、九、十、十四

真理の律法を記され、手に二つと無き良き書物を持ち、其の眼を擧げて天を望める如く見えたるは、之れ其の職務が、罪人には知られざる事共を先づ知りて、さて之れを教へ諭すにあることを表はすなり。されば亦見らるゝ如く、さながら人々に向ひて立ちて教を説けるにも似たるなり。また其の頭の上に冠冕の懸れること、及び此の世が其の後の方に捨てられたるやう見ゆるなるは、之れ亦此の人が其の主君に事ふる忠義の爲め、浮世の物事を凡て輕んじ見捨つるも、而も來るべき次の世にては、其の報いとして必らず榮えを蒙むべきを表はすなり。さるにても」と云ひさして釋義者は言葉を繼ぎ、「此の畫を先づ第一に示したる次第を云はんには、抑も此の畫像なる人は、卿が志させる方の國王より、特に許されて權を授かり、此の道筋の難澁なる所々にて、卿等を手引きし得さすべき唯一個人なればなり。かゝれば我が卿に示したる事に能く注意し、また卿が見た

る事どもを懇ごろに心に留め置くべし。恐らく道中にて然るまじき者に出で逢ひ、正しき方に指導せんなど、伴はり誘はるゝこともあらん、されど斯かる者の道は皆な亡滅の方に向ひ行くなり」と云ふ。次に彼の**人基督信者**の手を取りて、一とつの大廣間に案内せり。此の部屋は今まで掃除したること無きため塵いと深し。かの釋義者は暫し其の内を見廻はして在りしが、やがて一人の男を招きて之れを掃かしめたり。さて彼の男の掃き出でけるに連れて、埃立つこと實に夥だしく、**基督信者**は爲めに哽せ返へらん斗りとなりたり。其時釋義者は側へに在りける一人の少女に向ひ、「いで、水を取り來て部屋に撒かれよ」と云ふに、かの少女其の如く爲しければ、直ちに思ふがまゝに掃き浄められけり。

基督信者之れを見て、「こは亦如何なる仔細ならん」と云へば、かの釋義者の答ふるやう、「さて是れなる廣間は、未だ愛でたき福音

羅馬書 二章 十五節
哥林多前書 七章 十五節

の恩澤を受けず、かくて浄められしことなき人の心なり。かの塵埃は其の生れつきの罪惡、並びに其の全身を汚したる内部の腐敗なり。最初に掃かんとしたる男は律法なるが、次に水を取りて撒きたる少女こそ福音にてあるなれ。げに卿の目撃しつる如く、初めの人の掃き出でたるに連れて、部屋は忽ち埃立ち到底も彼の人の手に浄めらるべくもあらず、却つて卿は其れが爲めに哽せ返へらんと爲たる事なるが、此は彼の律法てふ者が、(それを守り行なふ事に依りて)人の心を罪惡より潔むべき筈なるに、却つて律法の爲めに罪惡は明らかになりて活き返へり、また律法に依りて禁せらるゝ程、罪惡も愈よ力づきて、心の中に彌や増さり、さては鎮め兼ねるに至ることを表はすなり。

また卿は彼の少女が部屋の内に水を撒きて、思ふが儘に掃き浄めたるをも見たる事なるが、こは主の福音が人の心に入りて、其の優

約翰福音 二章 二十節
全三十五節
使徒行傳 九章 十節
羅馬書 六章 五節
以弗所書 二章 十五節

にやさしく且つ貴き感化を興ふるとき、卿が親しくも視つる如く、かの少女が床の上に水注ぎて其の塵埃を鎮めたらんやうに、此の福音を信するに依りて人の心は潔められ、従つて榮光の主と共に住ふにも相應はしかる者となり、かくて罪障は力敗おれて消滅するに至ることを表はすなり」と打ち語れり。

さて亦我れ夢の中に見けるに、かの釋義者は基督信者の手を取りて、一とつの小やかなる房に導びきしが、此處には二人の兒童ありて、椅子を並べて腰掛け居たり。年上なるは名を情慾と云ひ、今一人は忍耐と呼べり。情慾の方は如何にも不平らしき顔つきなれど、忍耐は最と沈着たり。基督信者は之れを見て、「かの情慾の不機嫌なるは何故ならん」と尋ねれば、釋義者の答ふるやう、「此の兒童等の後見なる人、次の年の始めつ方を期して、最と好き物を得させんとすることなるが、彼れは其れを今直ちに得んと焦躁がるなり。され

「忍耐の方は心よく待ちてあるなり」。

其時我れ見けるに、一個の人財寶の袋を持ちて出で來り、之れを情慾の足もとに振り撒きたり。されば情慾は之れを取り上げて、さも嬉しげに打ち喜こび、同時に忍耐を顧りみて之れを蔑視み嘲笑ひたり。さり乍ら我れ見てあること唯だ一時の程なりしに、早くも彼れは悉皆く遣ひ捨て、さては襤褸の外其の身に殘るものもあらずなりたり。

されば基督信者は彼の釋義者に向ひ、「猶ほ委しく此の事由を聞かされよ」と云へば、彼の人の云ふやう、「此れなる二人の若者は模型にて、此の世の人の「情慾」と、來るべき次の世の人の「忍耐」とを表はす者なり。さても卿現に見らるゝ通り、かの情慾は今年中乃はち此の世に在る間に、直ちに總ての物を得んとするなり、之れ此の世の人の常なり。げにや人々は、是非とも凡ての好き物を今直ちに

に得んと欲ひて、次の年乃はち次の世まで其の股分の爲めに待ち得る者なし。來らんとする世の愛で度さに就きては、數多の聖き證言もある事ながら、彼等の身に取ては、「藪の中の二羽より、手の中の一羽」と云へる俗諺の方遁かに適へり。されど亦卿の見つる如く、かの情慾は時の間に悉皆く遣ひ盡して、忽ち襤褸のみの姿と成り果てたる事なるが、世の終りには斯かる人々も亦此くの如くなるべきなり」。

之れを聞きて基督信者の云ふやう、「さて我身は忍耐の極めて智慧あることを幾重にも合點したり。先づひとつには、自から制へて最もも良き物を待てること、二つには、外の人々の襤褸姿と成り果つる時、却つて榮えある身となるべければ」。

釋義、「げにや猶ほひとつを加ふべし。次の世の榮光は絶えて盡き果つる事之れ無きも、此の世の榮華は忽ちの間に過ぎ失するなり。」

されば情慾は初めに左ばかり好き物を持ちたればとて、忍耐を笑ふべき道理もなく、忍耐こそ最後に最も好き物を持つことなれば、却つて情慾をば笑ふべきなれ。そは後なる者時機に及びて到らんとし、前なる者は之れに其の處を譲るべきも、後なる者には最早や従ひ來る者なければ、其の處を何者にも譲ることなし。されば始めに其の股分を持つ者は、之れを費やすこと必らず一時の程なるべけれど、終りに其の股分を持たん者は、限りなく之れを持つべきなり。かゝれば彼の富める人に就きても、「汝は生きたりし時に汝の福を受け、またラザロは其の苦を受けしを憶へ、今彼れは慰さめられ、汝は苦しめらるゝなり」と云はれたるなり。

基、「さては我身も今在る者を貪り望まんより、來るべき世の物を待たんこと、遠く勝れたる由を會得せり」。

釋義、「云はるゝ通りなり、目に見ゆる物は假初にて、見えざる物

路加十
六ノ二十
五

哥林多
後四ノ十
八

は永久なり。さり乍ら此世の物と肉體の嗜慾とは、互ひに隣り同士の間柄なるに、來らんとする世の者と人間の慾情とは、其間互ひに異邦人の如くなれば、おのづから一方には端なく離れ難き仲となるも、亦一方にては絶えて相近づくこともあらざるなり」。

其時我れ夢の中に見けるに、かの釋義者は基督信者の手を取りて、唯或る處に導びきしが、是處は壁の傍らにて、下より火焰燃え上れり、又一個人其の側へに立ち、絶えず夥多しく水打ち灌ぎて、之れを消し止めんと努むれども、火は猶ほ愈よ熾んに、且つ愈よ高く燃え立ちたり。

基督信者は之れを見て、「此は亦如何なる仔細ならん」と云へば、かの釋義者の答ふるやう、「此の火は人の心中に働らく慈惠の業なり。また其の上に水打ち灌ぎ、之れを消し止めんとする者は惡魔なるが、見らるゝ如く、火は却つて彌や高く又熾んに燃え立つなり。さて其

の理由をも亦卿に示すべし。斯く云ひて彼れを導びき、其の壁の後方に廻はり行けば、是處には一個の人、其の手に油を盛りたる器を持ち、之れ亦絶えず（而も人知れず）其の火の上に油を打ち灌ぐを見たり。

基督信者之れを見て、「此も亦如何なる仔細ならん」と云へば、かの釋義者の答ふるやう、「此は之れキリストなり。絶えず慈惠の油をもて、一と度び人の心中に始め給へる働らきを扶持けらるゝ處なり。斯かる次第なれば、たとへ悪魔が如何様に爲したりとも、キリストの民等は猶ほ其の慈惠を覺ゆるなり。又卿の見られし如く、かの人は此の火を扶持くるとて壁の後方に立ち居る事なるが、之れ亦悪魔の誘惑に遇ひたる者に取りては、其の心の中に續けらるゝ慈惠の働らきを見とむることの、如何ばかり難かるべきを表はすなり。我れ又見けるに、かの釋義者再び基督信者の手を取りて、唯或る

の哥林多
後十二ノ

晴れやかなる處に導びきたり。是處には大いなる高樓ありて、見る目もあやに最と麗はしかり、されば基督信者は此の景を見て甚く喜こびしが、猶ほ亦唯或る人々の皆な黄金の衣裳を装ひて、其の上を往來するを見たり。

さるからに基督信者は打ち仰ぎて、「あはれ我らも彼處に行かまし」と云ふ。其時かの釋義者は基督信者を携さへて宮殿の門に連れ行きしに、是處には大勢の人々其の門前に打ち集り、さも入らまほしげなれど強て亦入らんとせす立ち居たるを見たり。又其の門の近くに机を置き、墨壺と帳面を其の前に備へて、其の内に入り行く者の名を書き止めんと扣へたる人あり。且つ亦其の門の入口には、甲冑を着たる多くの人々立ち並びて之れを守り、誰れにても之れに入らんとする者には、在らゆる損害を加はへ呉れんと身構へ居たり。基督信者は之れを見て稍や不思議の思ひを爲し、且つ人々も彼の武

装ふたる者共に恐怖を爲して後退みする折、相貌極めて逞ましげなる人出て来り、かの帳付けする者に打ち向ひて、「願はくは我が名を記して給はれ」と云ふを見たり。其人斯く爲し了りて太刀を抜き、また其の頭に兜を着け、やがて門の方に突き入りしが、武装ふたる者共かくと見るより、死力を盡して打ち掛れども、其人少しも萎縮むことなく、鎧を削り、火花を散らし、最とも激しく戦かひたり。かくして其の身も數ヶ所の創傷を蒙り、また拒げる者共にも數多の傷手を負はせし後ち、終に敵の中を通り抜けて一方の道を切り開き、愈よ宮殿の裏に進み入りたり。其時妙へに楽しき聲、家の中に起り、また高樓の上なる人々も、聲に和はせて謠ふを聞けば、

「よくこそ来つれ、

よくこそ来つれ、

君が麻ち得し

其の榮えこそ

千代に八千代に

末遠永に

かくて彼の人其の裏に入り行きしに、やがて人々と同じく黄金の衣裳を以て装はれたり。基督信者は之れを見て打ち微笑み、「げにや此の仔細は我身にも覺らるゝ心地す」と云ひつゝも亦言葉をつぎ、「さらば卒ぎ、出で立ちなん」と暇乞ひするに、彼の釋義者は之れを止どめ、「いや、今少しく卿に示し度き者もあれば、其の上にて打ち立たれよ」と云ひつゝ、再び其の手を取りて、最と聞きひとつの部屋に導びきしが、是處は鐵の檻にて其中に一個の人坐り居たり。さてつくつくと打ち見やるに、此人如何にも悲しげなる態にて其の手を又ぬき、其の眼は下方を見つめ、また宛ながら其の心も破ぶるゝやうに、深き嘆息を漏らし居たり。基督信者は之れを見て、「此は亦如何なる仔細ならん」と尋ねれば、かの釋義者は首を回らし、親づから問ひ試みて見るべき由云ひ合めたり。

されば基督信者は其人に向ひて、「卿は如何なる人ぞや」と云へば、其人答へて、「あゝ、往時には似もつかぬ我身なり」と云ふ。

基、「さりどては、昔し如何なる身なりしぞや」

其人云ふ、「實に當時は、天晴れ完全き信者なりと、自身も思ひ、他人も亦許せし者にてありしなり。亦その頃は天の都にも相應はしかるべき我身なりと思ひし程に、常に彼處に到らんことを考へては喜こびし事なり」

基、「さて今は亦如何にぞや」

其人、「今や我身は絶望の人にて、斯く此の鐵檻の中に閉ぢ込めらるゝなり。我身は遁れ出でんこと叶はず、あゝ、遁れ出でんこと最早や思ひも寄らず」

基、「さて如何にして斯かる姿には成り果てしぞや」

其人、「我身は目を醒まして慎しむことを打ち忘れ、意の駒に任せ

て慾を恣いまいにし、神の慈恵をも其の御言葉の光りをも輕蔑るにして罪惡を犯し、聖靈を愛へしめては之れに去られ、惡魔を招きては之れに着き纏つはられ、又神の怒りを惹き起しては之れに見捨てられ、遂には悔い改たむる事も出來ざる迄に我が心固くなに成り果てたり」

其時基督信者は釋義者に打ち向ひ、「あはれ斯からん人には最早や望もあらざるにや」と云へば、釋義者は再た首を回らし、「それも其人に尋ねて見られよ」と云ふ。

されば基督信者は言葉を継ぎ、「さても卿は絶望の鐵檻の中に閉ぢ込められたる斗りにて、外に望どてはあらざるにや」

其人、「あらず、全く之れ無し」

基、「さりとは如何に、神の御子は最と憐れみに富み給へるに」
其人、「我身は自身の爲めに再たび彼れを十字架に磔け、その面目

を辱かしめ、其の恩義をも辱かしめ、其の潔き血をも尋常の者と爲し、又恩を施こす聖靈をさへ侮りたり。斯かれば我身は頼みとすべき凡ての望に見離され、今は唯だ恐怖の外に身に残りたる者も無し。それとても、孰れ讎敵の如く我身を責め苛なむべき、脱れぬ審判と烈しき刑罰とにかゝる、世にも凄まじき恐怖、また眞面目なる恐懼にてあるなり」○

基、「何とて亦斯かる有様には身を沈めけるぞや」

其人、「慾ゆるなり。浮世の娯樂と幸福とを待みに思ひて、之れを得るを此上なく喜びしことなるが、今となりては其の一とつとして我身を苦しめざる者もなく、宛ながら毒虫の如く身を嚼むなり」

基、「されど今また悔い改ためて立ち返へる事も叶はぬにや」

其人、「神は最早や我身の悔悟をも拒み給ふ。其の御言葉も却つて我が信心を頂垂れしむるなり。げにや亦、此の鐵檻の中に我身を閉

ぢ込めたるも、神親づからの御業にて、斯くなる上は我身を助け出す者世に一人としてあるべからず。あゝ、あゝ、運の盡なれや。未來永劫かく悶へ苦しみて、悲しくも亦傷ましき目に遇ふことよ」

其時かの釋義者は基督信者に打ち向ひ、「あはれ此人の憂たてき有様を心に留めて、幾久しく卿の警戒と爲られよかし」と云ふ。基督信者實にもと領つきて、「こは最と恐ろし。我身は目を醒まして能く憤しむやう、また此人を憂き態に沈めたりてふ、其の元因をも避ける得るやう、神の助けを仰ぎ祈らん。さて、君よ、最早や出下立ちても宜しかるべきや」と云ふに、かの釋義者は、「いや暫らく猶豫あれ、今一とつの事を卿に示すべければ、其の上にて愈よ打ち立たれよ」と云ひつゝ、再び其の手を取りて唯或る奥房に導びきたり。是處には一個の人、今しも寢床より起き出で、其の衣を着換へながら、身を震はせて戦のき居たり。基督信者は之れを見て、「此人何とて此く

は身震ひするならん」と問へば、釋義者また首を回らして彼の者に
 向ひ、事の由來を基督信者に物語れよと命じたり。
 さて彼の者語り出でけるやう、「此夜さり我れ睡眠の中にひとつの
 夢を見たりしが、こはいかに大空悉とく掻き曇りて其の闇きこと比
 ひなく、また雷鳴烈しく電光閃めきて最と物凄きに、我身は痛くも
 打ち恐れたり。かくても我れ夢の中につくつくと眺めて在れば、俄
 かに暗雲群ら立ち起り、其れに續きて大いなる喇叭の音響き渡る。
 また一個の人一つの雲に乗りて現はれしが、其の後ろには數限りな
 き天上の民従ひたり。此の人々皆な燃ゆる火焰の中に在りしかば、
 大空も亦悉とく燃ゆる火焰と變りたり。其の時一つの聲ありて云ふ、
 「死にたる者よ、起き出でよ、起きて汝の審判を受けよ」と。忽ち巖
 窟悉とく裂け、墓悉とく破れて、其の中なる死せる者皆な出で來れ
 り。其中或る者どもは空打ち仰ぎて殊の外にも喜こびしが、或る者

⑦約翰五
 八、二十
 九、二十
 十、二十
 十一、二十
 十二、二十
 十三、二十
 十四、二十
 十五、二十
 十六、二十
 十七、二十
 十八、二十
 十九、二十
 二十、二十

五十一、帖撒羅後
 一、七
 二、十五
 三、十五
 四、十五
 五、十五
 六、十五
 七、十五
 八、十五
 九、十五
 十、十五
 十一、十五
 十二、十五
 十三、十五
 十四、十五
 十五、十五
 十六、十五
 十七、十五
 十八、十五
 十九、十五
 二十、十五
 二十一、十五
 二十二、十五
 二十三、十五
 二十四、十五
 二十五、十五
 二十六、十五
 二十七、十五
 二十八、十五
 二十九、十五
 三十、十五
 三十一、十五
 三十二、十五
 三十三、十五
 三十四、十五
 三十五、十五
 三十六、十五
 三十七、十五
 三十八、十五
 三十九、十五
 四十、十五
 四十一、十五
 四十二、十五
 四十三、十五
 四十四、十五
 四十五、十五
 四十六、十五
 四十七、十五
 四十八、十五
 四十九、十五
 五十、十五

どもは亦山蔭などに身を潜めんと其の避け處を求めたり。其の時雲
 に乗れる人一つの帳簿を繰り開きて、浮世の者共前に出でよと命じ
 たりしが、視よ、烈しき火焰の流れ一道、其の前より湧き出でける
 により、左右なくは近づくべくもあらず、おのづから其の距離隔た
 りて、宛ながら裁判の座にて調役と犯罪人との對ひたらんに似たり。
 亦かの雲に乗れる人、その従伴の者どもに命じて云ふ、「烏糞の麥と
 麥糞とはひとつに集め、之れを燃ゆる火の湖に投げ入れよ」と、其
 聲に應じて底なき坑、忽ち我が立てる足下に開け、凄まじき物音し
 て燃ゆる石と黒煙り夥多しく其口より出で來れり。亦同じく命じて
 云ふ、「麥は斂めて倉に納れよ」と、又其の聲に應じ、數多の人々の
 携さへられて雲の上に登るを見たりしが、此は何とせん、我身は後
 に残されたり。されば我身も潜み匿くれんと爲しつれど、雲に乗れ
 る彼の始終其の目を我が上に着けたれば、其の事叶はず、猶ほ亦

我身の罪過も等しく心の中に浮び來り從つて我が良心は在らゆる事に向ひて我身を責む、と見て眠りより醒め出でたり」と云ふ。
基、「かゝる事を夢に見たればとて、然のみ恐るゝ事もあるまじきに」。

彼の者、「いや、いや、我身は實に審判の日の來りしと考がへ、而も其の爲めに未だ支度を爲し居らざりしを思ひたればなり。猶ほ何よりも恐ろしかりしは、多くの人々は天の使に携さへ行かれて我身一人殘されたること、また地獄の坑が丁度我が立てる足下に其の口を開きたること、また我が良心の我身を責め苛なみたること、さては亦、かの審判者が其の顔に充分の憤怒を含みつゝ、絶えず其の眼を我が上に着けたりと思ひつる事どもなり」と打ち語れり。

其時かの釋義者は基督信者に向ひて云ふやう、「凡て見聞きしつる事どもを、卿は能く心に味はひたるにや」。

基、「さなり、また希望と恐懼ごをも身に覺ゆるなり」。

釋義、「げに是等の事共は、之れより進み行く道筋にて、必らず卿を鼓舞ます鞭ごもなるべければ、能く心に留め置かれよ」。
さる程に、基督信者は再び帶引きめめて、また旅立ちの支度すれば、かの釋義者は之れを送りて、「あゝ基督信者どのよ、願はくば訓慰師常に卿と共に在し、都に上る道すがら恙なく卿の手引きせられんことを」と云ふ。かくて基督信者は是處を立ち出で、歌うたひつゝ進み行けり。

「君が親情の嬉しさに
旅路の鬱さも忘れたり、
身の爲めにとて且つ摘みし
志勵ます教へ草
或るは楽しく麗はしく

或るは物憂く凄まじき

世の不思議をも見つるもの哉。

第三程

世を渡る旅のあれ野の明け暮れに

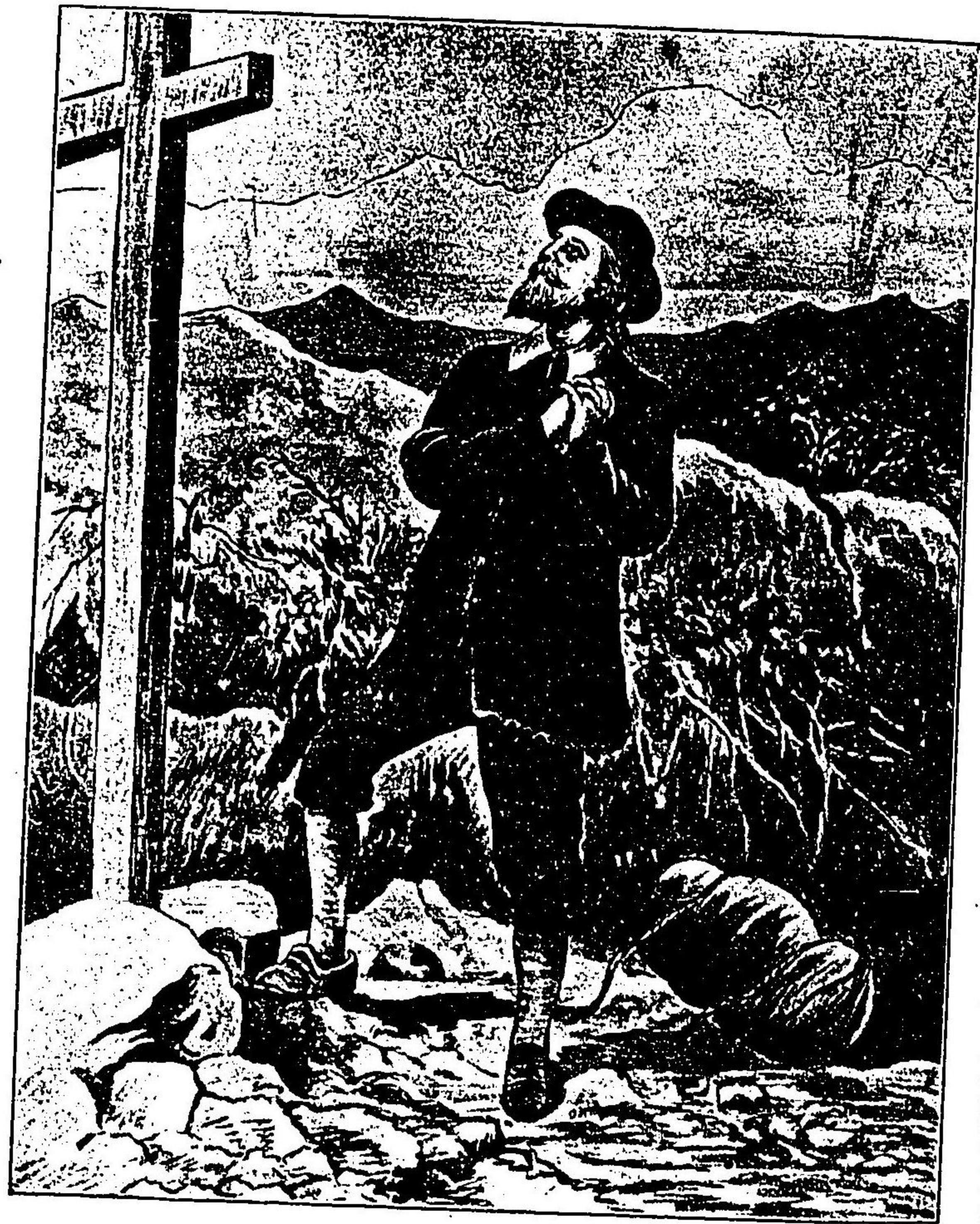
天つみその、春をしぞ思ふ

以非亞
二十六

さて我れ夢の中に見けるに、今しも基督信者が差しかゝりたる街
道は、其の兩側を石垣もて圍はれたり。此は救拯の垣とて知られた
る石垣なり。さる程に基督信者は、背の重荷の爲め少なからず行き
煩らひつゝも、なほ行程を急ぎて此の街道を上り行けり。かく急ぎ
續けて遂に唯或る小高き處に來りしが、其の上には一個の十字架立
ち、また少し下りたる麓の方には、一個の墓穴横たはれり。さて



犠牲の身を精神の悟り初めて魂の自由の感



す感を山白の魂靈てめ初てり悟を神精の身献牲擬

第二十六

天路歷程 第三程
 或るは物憂く衰まじき
 世の不思議をも見つるもの哉。

第三程

世を渡る旅のあれ野の明け暮れに
 天つみその、春をしを思ふ

さて我れ夢の中に見けるに、全しも基督信者が差しかゝりたる街
 道は、其の兩側を石垣もて圍はれたり。此は救世の垣とて知られた
 る石垣なり。さる程に基督信者は、背の重荷の爲め少なからず行き
 煩らひつゝ、なほ行程を急ぎて此の街道を上り行けり。かく急ぎ
 續けて遂に崖或る小高き處に來りしが、其の上には一個の十字架立
 ち、また少し下りたる麓の方には、一個の墓穴横たはれり。さて

亦我れ夢の中に見けるに、かの基督信者愈よ上り来て其の十字架に
近づくと見れば、其の重荷おのづから緩みて肩を離れ、また其の
背を離れて轉げ落ち、愈よ轉げ落ちて墓穴の口に到り、やがて亦之
れに落ち入りて忽ち見えすなりたりけり。

基督信者は之れを見て心も晴る、斗り打ち喜こび、さも嬉しげに
聲を揚げて、「あゝ主は自身の患苦に依りて我れに安寧を與へ、また
其の死ぬることに依りて我れに生命を與へ給ふなり」と云へり。さ
りながら是れなる十字架を見る事に依りて、此くも重荷より安めら
るゝ事の最と訝かしく、まばし其の下に立ち盡して、驚ろきつゝも
静かに眺め居たりしが、さてつくぐと打ち眺め、又つくぐと眺
め入る程に、何時しか有難さ身に染みて、涙は頬に溢れ充ちたり。
かくて基督信者斯かる有様にて佇立む折しも、視よ三個の輝やける
者出で來り、「平安汝の上に在れ」と口々に唱へて彼れを祝したり。

●馬可二
ノ五

●撒加利
三ノ四
以弗所
ノ十三

又其の先なる者は彼れに向ひて、「汝の罪赦されたり」と云ひ、次なる者は其の襪を脱ぎ去りて、新たな美服を着せ、亦第三の者は其の額に記號を付け、且つ印を押したる一個の巻物を興へて、行く行く之れを讀むべき由、また天の門に達せん時、彼處にて差し出すべき由をも云ひ含めたり。かく爲し了りて又何處ともなく去り行きけり。其時基督信者は心嬉しく勇み立ち、やがて歌ひつゝ進み出でたり。

「こゝに来て

こゝに脱れし罪惡の重荷、

憂愁の雲も今晴れし身の

喜こび何に喩ふべき。

うれしや十字架、

うれしや墓、

あゝ我が罪の身代はり
死にし君こそ猶ほ嬉しけれ。

我れ亦夢の中に見けるに、基督信者は斯く勇み進みて麓の方に下り行きしが、やがて少しく路傍を離れし處に、足械もて縛られたる三個の人の、前後も知らず伏し居たるを見たり。其の一人は淺薄、次は懈怠、又一人は放肆と云へる名なり。

其時基督信者は此の人々が斯かる有様にて伏したるを見るより、もしや起しやる事を得べくもやと、其の側に進み行きて、「さて卿等は帆檣の上を枕として眠れる人にも似たり、げに亡滅の海てふ底ひ知られぬ其の入江は、卿等の周圍に在るならずや。さらば目醒めよ、起き出でよ。又卿等の願ひとならば、我れは卿等を助けて此の足械をも取り去りやるべし」と叫びたり。亦彼等に向ひて、「もしかの吼ゆる獅子の如く遍行ぐる者の、通りかゝること知らんには、卿

●彼得前
五ノ八

●彼得前
五ノ八

等は論無く其の牙に掛りて、忽ち餌食となり了るべし」と云ふ。此
 時かの人々目を見開らき、しげくと「基督信者を打ち守りしが、さ
 て各自随意に答へ出でけるやう、淺薄、「何の危ふき事かあらん」。
 慮、「今少し眠りたし」。放肆、「大きにお世話、他人の事より先づ足下
 の御用心」斯く云ひ捨て、皆な再び眠り伏したり。
 されば基督信者は又其の道を續けしが、行く行く心の中に思ふや
 う、さるにても我れ親しく此の人々を起しやり、又勸めもし誘ひも
 し、且つは其の足械をも取り除けやらんとまで、さも心置きなき程
 の親切を盡せし者を、其身は斯かる危ふき有様に在り乍らも、猶ほ
 我れを輕んじて、却つて強面も爲しつることの訝かしさよと、獨り
 心を苦しめけり。かく思ひ惱みて在りける折しも、此の細道の左手
 なる石垣を乗り越えて、此方に近づき來る二個の人を見出でたり。
 其の一人の名は儀式者と云ひ、又一人は偽善者と呼べり。さて愈よ

近づき來りしかば、基督信者は之れを迎へて互ひに言葉を交はして
 けり。

基、「そも卿等は那方より、また那方にか越さるゝならん」

兩人、「我らは元と高慢自負の國に生れし者なるが、此度シオン
 山を拜まんとして出で立つなり」

基、「さりさては何とて此の道の入口なる、彼の門より來られざる
 ぞや、げにも記して、『門よりせずして他より踰ゆる者は窃賊なり強
 盜なり』と在るをも知られざるにや」

兩人、「かの門より入らんことは、我が國人の迂遠しと思ふところ
 なり。されば我らが爲しつるやうに、常時も近みちして此の石垣を
 乗り越ゆるなり」

基、「さては、我等の志ざすなる彼の都の主君に對し、かく其の記
 し置かるゝ聖旨を犯すこと、亦之れ一とつの罪過ならずや」

其時かの兩人は基督信者に向ひて、其儀は絶えて案じ煩らふべき要もなく、此は全く彼の國人の習慣にて、一千餘年も續け來り、其の証據とても必要とならば示すに足るべき者數多ある由打ち語る。

基、「されど卿等の慣行を律法に依りて糺しなば如何があらん」。

兩人は亦之れに告げて、此は既に一千餘年も在り來れることにて、今猶ほ偏頗なき裁判人の目には、正統なる習慣と見做されんこと疑ひなき由打ち語り、更に言葉を繼ぎて云へるやう、「最早や此の道に達したる上は、那方より來れりとして、そは頓着するにも及ぶまじ。見受くる處、卿は彼の門よりこそ此の道には入りたるならぬ、まかし我等とても亦現に此の道に入りて在り、唯だ石垣を乗り越えたる迄なり。されど入りたるからには入りたるに相違なく、さては卿の我等に優れるところ幾ばくぞや」。

基、「卿等は無作法なる己れの空想に従がひて歩み、我れは亦我が

主の規程に従がひて歩むなり。此の道の主は既に卿等の如き者を竊賊の部に入れ置かれたり。されば此の道の終りに到りて、卿等は眞實ならざる人々なりと認められん。卿等は主の指圖を受けずして入り來りたれば、亦其の慈悲をも蒙むらずして出で去るべし」。

之れには彼の兩人然までも答へず、唯だ自からを顧り見よと云へり。其時我れ見けるに、三人打ち連れて暫しは互ひに語らふことなく進み行きしが、やがて彼の兩人は基督信者に向ひ、さても儀式や十誠の類ひなどを正しく守ることは、彼等とても基督信者に劣るまじき由を告げて、亦更に言葉を續くるやう、「されば卿と我等と別に優り劣りも無きやうなるが、唯だ卿の纏へる衣ばかりは聊さか差へり。思ふに此は隣人の誰れ彼れが、卿の裸躰なるを顧りみ、其の耻を匿さんとして贈り呉れし者ならん」。

基、「いかに儀式や律法を守ればとて、彼の門より來らざるからは、

卿等は到底も救はるまじ。また身に纏へる此の衣は、我が志ざす方の主君より賜はりし物にて、卿等の云へる如く、我が裸躰の耻を匿さん爲めなり。元來襤褸の外に着るべき者として無かりし身なれば、之れを恩惠の記念として頂だくなり。猶ほ亦自から思ふに、やがて都の門に達せんとき、主は我身が其の賜へる衣を着たるに依りて、我身を善良なる者と認め給はん。げに之れ我が襤褸を脱ぎ去られし其時、價なく身に授かりし物なるをやと、斯く思ひては行く行く自から慰さむなり。亦卿等は左まで氣にも留めざるやうなれど、我が額には此の記號あり、此は之れ我が肩より彼の重荷の落ち去りし其の時、我が主の最も親しめる友人來りて付けたる者なり。猶ほ其の上にひとつの印を押したる巻物をも授かりたり、此は道すがら之れを讀みて、慰藉を得よと云ふことにて、亦やがて天の門にも達せんとき、我が志ざしの確乎なる符として差し出すべき者の由なり。

さるにても卿等が斯かる物を所持せりとは信じ難し、げに彼の門より來らざるからには、必らず之れを持たぬなるべし。兩人の者は聞き了りて答ふる處なく、唯だ顔を見合はせて打ち笑へり。かくて我れ見けるに、皆な再び其の道を進みしが、獨り基督信者は先き立ち行きて、彼の人々とは再た物云はず、心の中に獨り問ひ獨り答へ、時には最も物思はしげに、時には亦さも嬉しげに、さては彼の輝やける者の一人より授かりし巻物を繰り開き、幾度か讀み出で、其の元氣をも養ひけり。其時我れまた見てあれば、皆な諸共に進み行きて、遂に困難峠の麓に到れり。此の麓にはひとつの泉あり、また彼の門より一文字に躡き來れる道の外に、猶ほ其の山の裾回に沿ひて右と左りに分れたる二條の道あり。されど彼の窄き道は直ちに此の峠に差し掛りたるが、それより峠に至るまでの登り路は、其の名を困難の切通と呼ぶ

れたり。

されば基督信者は泉の邊りに到り、暫らく清水を汲みて新たなる元氣を起し、愈よ歌ひつゝも此の峠に登り行けり。

「落ち行く果ての悪しからば

路安くとも何かせん、

雲井の春に逢ふべくば

辛苦もなごか厭ふべき。

さらばよ勵め我が心、

さらば登らん、いざ行かん、

生命の道の在るところ

路難くとも

山高くとも」。

さる程に、彼の兩人も亦此の麓迄は來りしが、此の峠の高く且つ

四十九
二十

嶮はしきを見、また其の傍はらに兩條の路あるを見、さては亦此の二道も彼の基督信者の行きたる道も、再び山の彼方にて相合ふことのあるなるべしと想ひ測りて、遂に此の岐路より行くべしと定めてけり。さては其の一條は名を危險街道と云ひ、今ひとつは滅亡街道と呼ばれたり。かくて一人は危險街道の方を取りて、果ては大いなる森の中に紛れ行き、また一人は直ちに滅亡道に従がひ行きて、怪しき山阪いと多き荒野の原に迷ひ入り、其處に躓づき打ち倒れて、再び起たすなりたりけり。

其時我れ基督信者の時に登る態を見んと、顧りみて其の方を眺めしに、初めの程は勇ましく急ぎ歩なりしも、次第に緩みて並歩となり、さては其の處の險はしさに全く歩みかね、漸やく手と膝とを働らかせて、攀ち上り行くを見受けたり。さては此の峠に到る山腹の處に、最と晴れやかなる一個の小亭あり。此は疲れし旅人を憩はせ

んとて、處の主が設け置きたる休み場所なり。されば基督信者は程なく是處に辿り着き、やがて内に入りて身を休め、さては懐中より彼の巻物を取り出で、之れを読みつゝ、自から慰さめ、また十字架の側らにて授かりし其の上衣をも打ち眺めて、今更の如く獨り心に喜こび居たり。かくて暫しが程は獨り樂しみて居たりしが、何時とは無しに眠氣を催ほし、果ては全く眠り入りて前後も知らず、遂に日暮るゝ頃ほひ迄も其の處に止まりたり。また其の眠れる間に、彼の巻物は其の手の裏より離れ落ちたり。さて猶ほ眠りて在りける時、誰れとも知らず之れに向ひて、「惰たる者よ、蟻に行き其の爲す處を見て智慧を得よ」と云ひつゝ、眠りを驚ろかせば、基督信者は忽ち躍り起きて行程を急ぎ、愈よ急ぎて進む程に、やがて峠の絶頂にも達してけり。

さて漸やく峠の絶頂に達せし折しも、兩人の人忙たゞしく此方を

指して馳せ來れり。其の一人の名は臆病にて、今一人の名は猜疑なり。されば基督信者之に向ひ、「卿等は何事ぞや、かく悪しかる方に馳せ行くとは」と云へば臆病答ふるやう、「我等はシオンの都に志す者にて、それなる難所は通り越せしが」と云ひさして言葉を繼ぎ、「行けば行くほど危ふき目に遇ふことの彌や多かるに、今は振り返りて再び歸へり行く處なり」と云ふ。

猜疑も亦云ふやう、「まことや、今も今とて此の道に二匹の獅子の横たはれるに遭ひたり。眠りてあるや起きてあるや知らざれども、兎に角近づかば立ち處に引きも裂かれんと思はれたり」。之れを聞きて基督信者の云へるやう、「あゝ、卿等は我身を恐れしむ。さりとは身の安全を庶ねがひて、孰れの方にか遁れ行くべき。假りに我が故郷に立ち歸るとして見んか、そは既に硫黄と火にて焼かるゝ手筈に成り居れば、確かに我身も其處に死ぬべし。さて亦天の

都に達し得るとせんか、それこそ安全なるに極まりたり。さらば何處までも思ひ止むべきことかは。げにや進み行かんは死の恐れのあるにもせよ、限り無き生命も亦其の向ふにあり。されど歸り行かんは死の外何にも有らざるなり。好し然らば我身は猶ほも進み行くべし。かくて猜疑と臆病は其のま、峠を馳せ下り、基督信者は亦其の道を續けてけり。されど彼の人々より聞きつる事共を思ふにつけて、いで彼の巻物を讀て聊さか力を得んものと其懐中を探りたり。さて探れども絶えて無し。其時基督信者は甚くも望を失なひて爲すべき術も辨まへず、げにや常々夫れに依りて慰さめられ、且つ天の都に達せんときの通券ともなりぬべき物を失なひつる事なれば、心いやまし掻き亂れて、全く途方に暮れ果てたり。遂に亦自から思ひかへして、かの山腹なる小亭に眠りつることを覺りしかば、直ちに跪まづきて其の淺ましかりし事の爲めに、神の赦を祈り願ひ、やがて巻物を

を尋ねて元の道に歸へり行けり。あゝ其の道すがら基督信者の胸中に盜ふれし憂さ悲しさは如何にありけん。げに彼處は疲れし旅人の爲め、唯だ時の間の休息所として備へられたる者なるを、何とて斯かる所に淺ましくも眠りは爲けん、幾度か其の身を責めて打ち嘆き、時には深き太息を漏らし、時には亦潸然と打ち泣きたり。されば斯くして歸へり行き、其の行く行くの道すがら、あはれ幾そ度か我が道中の慰藉となりたりけん彼の巻物、若し幸ひにして縁絶えずば、再び我が手に返へり來よかしと念じつゝ、心を配りて道の兩側を見もて行くに、程なく再び彼の小亭の見ゆる處に出で來れり。されど其の處を見るにつけ、其の身の眠りしことの悪しかりしを想ひ起すことも、益す心に鮮やかになりて、悲嘆は更に彌や増したり。かゝれば其の眠りの罪深きを傷み悔やむあまり、「あゝ我れ惱める人なるかな、かく晝の間に眠らんとは、また斯く困難の真中に在りて

眠らんとは。さても亦、處の主が殊更に建て置かれて、旅人の靈魂を勞恤らんとし給ふ場所なるを、却つて肉躰の安樂を貪ぼりて、是處に斯く我が慾を遂げたりとは。あゝ幾歩をか空しくも重ねることぞや、昔しイスラエル人が紅海の道筋にて、其の罪惡ゆるに跡戻りせし例も斯くはありけん。げに罪深き彼の眠り故ならざらんには、喜悅をもて進みも行へべき此の歩を、今は悲嘆をもて斯く踏み返へる次第なり。げに今頃は路程遠くも進み得べかりし者を、あゝ一度にて充分なるべき道すぢを、三度びも重ねて行き返へるべしとは、猶ほ其の上に日さへ早や暮れなんとすれば、且つは間路にも紛れなまし。あゝ、あゝ、眠らざりせば宜かりし者を、と獨り語ちつゝ返へり行けり。

さる程に、漸やくにして再び彼の小亭に歸へり着き、暫しは打ち伏して盡させぬ涙に暮れたりしが、さて悲しげに首を擧げて探し求

め、遂に(神の聖意なるべし)腰掛の下を差しのぞきて、端なくも彼の巻物を見出でしかば、身震ひしつゝも急ぎ取り上げて確と其の懷中に納めたり。げにや此の巻物こそ其の生命の保證狀にて、且つは志ざす避難所に到らんときの通券なれば、失なひて今また再び之れを得つる、其の喜こびや如何にありけん。されば基督信者は其の懷中に之れを納め、また其の落ちたりける處を打ち見やりつゝも、數多度び神に感謝の祈りを捧げ、さて涙と喜悅に充ちて、再び旅路に出で立ちたり。

此度は前に引き更へて歩の進みも最と捷やかかりしかど、彼れの峠に達するをも待たで、日は餘光なく暮れ果てたり。されば基督信者は亦もや其の眠りしことの愈よ徒づらなりしを想ひ返へし、「あゝ罪深き眠りよ、汝れ故にこそ我れは今旅路の闇に紛れなどはずれ。げに罪深き睡眠ゆるなればこそ、歩まんに日影なく、暗黒は行程を

おほひ、また怪しき禽獸の啼聲凄まじかる中を、獨り淋しくも行くべきなれ」と獨り語り、また嘆ちつゝ上り行きたり。其時また彼の猜疑と臆病の兩人が、恐ろしくも見たりとて語り聞かせし獅子の話を、今更の如く思ひ出で、心の中に云へるやう、「まことや此の類ひの猛獸は夜の中に彷徨ひて餌食を求む、さらば此の暗黒の中に出で遇ひたらんには、如何にしてか之を遁れん、如何にしてか引き裂かるゝことを脱ぬかれん」とかくて猶ほ其の不行狀のはかなかりしを嘆き續げつゝ進みしが、其時不圖眼を擧げて打見やれば、こはいかに最と莊嚴なるひとつの高樓ありて、此の街道の側らに立てるを見たり。之れ美麗宮と呼ぶるゝ宮殿なり。

さる程に我れ夢の中に見けるに、基督信者は之れを見て歩みを早やめ、もし是處に一夜の宿りを借ることを得べくもやと彼方を指して進み行きたり。さて行きて程なく道幅いと窄き小路に入る、之よ



るはた横に後亦に前難百、く遠途てしさんなれ暮日

り門衛の小舎までは猶ほ一丁あまりもあるなるべし。基督信者は行く心配りて進みしに、やがて其の道筋に三匹の獅子あるを見出でたり。其の時基督信者思ふやう、「是れなり、是れなり、彼の疑や臆病も此の危難の爲めにこそ逃げ返へりたる者ならめ。」此は繁ける獅子なれど、其の鍵は彼れの入らざりしなり。されば基督信者も恐怖を催はし、且つ進みなば死ぬるの外はあるまじと思ひて、自身も彼の兩人の跡を追ふて歸り行かんかと考へ居たり。時に其の名を守護と呼べる門衛遙かに小舎の中より打ち見やり、今しも基督信者が一處に立ち留まりて、さては引きも返へらん風情なるに、急ぎ聲を掛けて呼び止ごめ、「それなる獅子は鍵もて繋がれたれば恐るゝに及ばず、其は人々の信仰を試みて、其の有り無しを見別けん爲めに置かるゝなり。道の真中を通り見られよ、絶えて些さかの害も無からん、さりとては卿も斯くまで心弱さか」と呼ば



るはた横に後亦に前難百、く遠途てしさんなれ暮日

馬可四
ノ四十

り門衛の小舎までは猶ほ一丁あまりもあるなるべし。基督信者は行く心こころを配りて進みしに、やがて其の道筋みちすぢに二匹の獅子あるを見出でたり。其の時基督信者思ふやう、「是れなり、是れなり、彼の猪た疑ぎや臆病おびやうも此の危難きなんの爲めにこそ逃げ返へりたる者ならめ」。(此は繋つなげる獅子なれど、其の鍵かぎは彼れの目に入らざりしなり)されば基督信者も恐怖おそれを催もよほし、且つ進みなば死ぬるの外ほかはあるまじと思ひて、自身みづかも彼の兩人ふたりの跡あとを追おふて歸り行かんかと考へ居たり。時に其の名なを守護しゆごと呼べる門衛遙とほかに小舎の中なかより打ち見やり、今しも基督信者が一と處ところに立ち留まりて、さては引きも返へさん風情かぜせいなるに、急いそぎ聲こゑを掛けて呼び止とどめ、「それなる獅子は鍵もて繋つながれたれば恐るゝに及およばず、其は人々の信仰しんじやうを試ころみて、其の有り無あしを見別わかけん爲ために置おかるゝなり。道の真中まなかを通り見られよ、絶たえて些いささかの害がいも無なからん、さりとては脚あしも斯かくまでに心弱こころよきか」と呼ば、

りたり。

さる程に基督信者は彼の門衛の指圖に従がひ、怖は怖ながらも獅子の前を通りしが、まことや其の吼ゆる聲は聞きつれど、害さては絶えて受くることもあらざりけり。

其時基督信者は手を拍つて打ち喜び、さて進み行きて、やがて彼の門衛の見張りせる其の門前に達しければ、基督信者先づ之れに向ひ、「是處は誰れ人の住處ならん、何は兎もあれ是處に一夜の宿は願はれまじぐや」と云へば門衛之れに答へて、「此の家は處の主の設けられし者にて、別けても旅人を恤はり慰さめ、また保護せん爲めに建てられたるなり」と云ひつゝ、亦尋ねけるやう、「さて卿は那方より、また那方に行かるゝぞや」。

基、「我身はシオンの山を志ざして、滅亡の城下を出で來たりたる者なるが、日も早や暮れ果てし事なれば、何卒今宵は是處に宿らま

⑦創世九
七、二十九

ほしと欲ふなり」。

門衛、「卿は何と名乗らるゝや」。

基、「往時は不爲牀と名乗りしが、今は基督信者と改名めたり。げに原來は神を知らざる民族より出でしも、天の勸諭に依りて今は潔けき幕屋に住はんとする者なり」。

門衛、「日も早や既に暮れたるに、かく遅く來れるは如何なる仔細にや」。

基、「まことに耻かしき次第なり、疾くにも是處には着くべかりしを、さりさては我身かの山腹なる小亭にて居眠りたり、げに夫れのみならず、居眠れる間に我が通券を落し、其のまゝにて峠の頂きに來りしが、ふと探り見るに見當らざりしかば、心忽ち悲しみに充ちて堪へ難く、已む事を得ず再び眠りたる場所に立ち返へり、漸やく尋ね出で、さて是處に來りたる始末なり。あゝ斯かる愚かな

ることを爲さざりせば、猶ほく疾くにも着くべかりしを。」
門衛、「いで我身此處なる處女の一人を呼ばんに、此人卿の言を宜しと思は、家法に依りて卿を迎へ入れ、家内の人々にも對面せさすべし。」

斯く云ひて門衛は側への鐘を打ち鳴らせしが、やがて其の響きに應れて戸口に出で來りしは、其の名を聰明と呼びて、眉目容貌いと麗はしく、又淑雅なる處女なり。さて何用なりやと尋ぬるに、彼門衛之れに答へて、「之れなる方は滅亡の城下よりシオンの山に赴むかる、途中にて、日も暮れ途にも疲れたれば、是處に今宵は宿を借らましと乞はるゝに、兎も角家法もあることなれば、先づ卿を招き、一と通り仔細を聞き、其の上如何やうとも計らふべしと告げたることなり」と云ふ。

其時かの處女は基督信者に向ひ、何方より那方に行くやと問へば、

彼れ其の山を語る。また如何にして是處には來つるぞと云ふに、彼れ亦其の由を告ぐ。次に道中にて見もし遇もし爲つる事共を問ふに、彼れは亦審さに其の趣むきをも打ち語る。さて最後に其の名はと尋ぬれば、彼れ答へて云ふやう、「名は基督信者なり。こゝは處の主の設け置かれて、旅行く者を恤はり慰さめ、また保護せらるゝ處と聞けば、猶ほ彌や更らに懐かしく、あはれ今宵は何卒是處に宿らまほしと思ふなり。」

かく語るを聞き了りて彼の處女は片頬に微笑を浮かめしが、而も其の眼は泪ぐみて暫し言葉も止絶えたり。稍ありて處女は基督信者に打ち向ひ、「我身いま家の者の二人三人ばかりを招き來るべし」と云ひつゝ、戸口の方に進み行きて、やがて謹慎、信心、また仁愛と云へる處女等と呼び來り、共に少しの言葉を交はせし後ち、基督信者を家の内にと伴なひたり。其時家内の人々も皆な玄關の處に出で迎

へ、「主に祝福まるゝ者よ、能くこそ來りたれ。是處は卿の如き旅人を待遇さん爲め、殊更に處の主の建てられたる住處なるに」と口々に云ひて挨拶す。されば基督信者も懇ろに首を低くし、猶ほ奥深く從ひ行けり。かくて座敷に入りて各々席も定まりしとき、處女等は先づ基督信者に飲むべき物を進め、さて晩飯の支度には間もあるべければ、其の間に猶ほ委しく基督信者の身の上をも聞かばやとて、まづ信心、謹慎、また仁愛の三人を話相手と定め、互ひに物語りを始めてけり。

信心、「さて基督信者どのよ、我身等は今宵誠を盡して卿を宿し進らすることなれば、卿も亦道中にて遇はれし事の節々を我等に語り聞かされよ、それこそ我身等を益する事も多かるべきに」。

基、「我身は卿等の斯く望まるゝを最と嬉しく思ふなり。そは元より我身も望む處なれば」。

信心、「そも初め如何なる事に動かされて、旅の姿に身を窶すこととはなられしぞや」。

基、「まことや恐ろしき音の我が耳に響きて、かくて長く彼處に棲ひ居らんには、避け難き滅亡に遇ふべしと聞こえたるにぞ、急ぎ故郷を遁れ出でたるなり」。

信心、「その故郷を出づるにも、殊更に此の道よりせられたるは、如何なる仔細のある事やらん」。

基、「そは神の聖旨なるべしと思ふなり。抑も滅亡の恐ろしさに心を苦しめながらも、猶ほ那方とも遁るゝ方を知らずありしかば、唯だ戦のきつゝ、打ち泣きてありける時、端なくも傳道者と呼ぶ人出て來り、此の外には頼るべき道もあるまじとて、ひとつの片折戸を指し示したり。かくて此の道に従ひて、愈よ此の家にも達しけるなり」。

信心、「さては釋義者の住處にも立ち寄りは爲られずや」。

基、「されば、彼處に立ち寄りて數多の事を見てけり。皆な一生忘るまじき事共にてありけるが、別けても三つの事は最と鮮明に心に留まれり。そは惡魔の妨害のいかに激しくとも、猶ほキリストが人の心に恩恵の業を支持らるゝこと、又一個人自づから罪惡を犯せる餘り、遂に全く神の慈悲より絶望するに至れること、さては亦、眠れる間に世の審判の日來れりと夢見つる人の事にてありけるなり」。

信心、「さて、さて、卿は又其の夢物語りをも聞かれしにや」。

基、「さなり、さても恐ろしき夢もある者かなと思へり。我身は其れを語らるゝ間實に胸痛く感じたりしが、されど今となりて考ふれば之れを聞きしを喜ぶなり」。

信心、「釋義者の家にて見られし事はそれのみにや」。

基、「猶ほあるなり、彼の人我身を導びきて大いなる高樓ある處を示せしが、其の内に在る人皆な黄金の衣裳を装ひ、また其の門には

武裝ふたる者共ありて之れを固め居たるに、一個の勇敢なる人出て來り、彼の者共と戦ひて其の道を開き、かくて喜び迎へられて永遠の榮を受くるを見たり。かゝる事の興深さに心を奪はれて、あはれ猶ほ一と歳も此の好きな人の家に留まらばやと思ひし程なり」。

信心、「さて道すぢにては其の他如何なる事を見られけん」。

基、「見たりとや、されば、夫れより幾程も進まざるに、誰れども知らず十字架に懸りて、血を流せる者の在りけるやう心に覺えたり。其れを見るや忽ち我が重荷は背より落ち去りたり、實は我身は最と重々しき荷を負ひて呻き居たりし事なるが、其時全く身を離れて落ち去りたるなり。今まで斯かる不思議を見し事なければ、最と思ひ掛けなくて、唯だつくゝと打ち眺めて居たりしに、(げに打ち眺めすには居られざりしなり)、其時又もや三個の輝やく者出で來れり。其の一個は我身の罪の赦されたる由を証明し、今一個は我が襦袢を

脱ぎ去りて、見らるゝ如き此の繻ある上衣を與へ、また第三の者は之れ亦見らるゝ通り、我が額に此の記號を付け、又此の印ある巻物をも與へたり」(かく云ひつゝ、懷中より其の巻物を取り出でたり)。

信心、「なほ其の他にも見られし事はありつるならん」。

基、「さて之れまでは先づ良き方の事共のみ語りつることなるが、元より其の外にも見つること種々あり。されば淺薄、懈怠、また放肆と云へる三人の者、くろがねの足械にて縛られながら、我が通り行く路傍に眠り居たるを見たり、されど誰れか亦斯かる輩がらの目を醒ますことを得ん。さて亦儀式者、偽善者と云ふ二人の者、シオンに志ざすと假託けて石垣を乗り越え來るを見たり。我身は親しく此の人々に語る處ありつれど、中々従がひ信すべくもあらず、かくて忽ちの中に見失なひたり。さて何より困難に覺えつるは彼の峠を登ること、また彼の獅子の口を通り抜ける事にてありつるなり。

あはれ此の門に見張りせらるゝ彼の良き門衛どの、お蔭に依らずば、我身も必らず逆戻りしたりしに相違なからん。されど神の恵の嬉しさ、今は是處に來りて亦嬉しくも篤き待遇を蒙むるなり」。

其時謹慎も此の話しの最と有益なるを思ひ、猶は基督信者の來歴を聞かん者と、些さかの問を設けて語り出でけるやう、「卿は立ち出でし故郷の事を時ありて思ひ忍のばるゝや」。

基、「思はぬにはあらぬなり。されど甚く耻ぢ且つ嫌ひ惡みてなり、我身もし立ち出でし故郷に心残りの有りもせば、歸へり行くべき機會もありたるべけれど、我身今は迢かに勝れる天の國を望みてあるなり」。

謹慎、「さるにても往時卿の慣熟れし事どもにて、今猶ほ卿に着き纏へる者はあらざるにや」。

基、「まことに之れあるなり。されど我が心は甚くも之れに逆らふ

羅馬七
ノ二十五
一、二十

なり。別けても當時我が郷人や我身などの共に快樂と心得たりしは、心の慾と肉の情なりしが、今は是等の者却つて我身の愛患となれり。げに思ふこと願ひのまゝならば、我身は此の後ち斯かる事どもを露斗りも心に掛けまじと願ふなり。されど良き事を爲して在らんと思ふとき、却つて悪しき者我身と共に在ることなり。

謹慎、「そは眞に卿の心を惱ます節ならん、されど又時ありては斯かる事ども、全く消え失せたるやう思はるゝことも無からずや」

基、「さなり、無からぬにもあらず。げに其様の思ひする時は、それこそ黄金にも代へ難き心地なれど、斯からんことの心に起り來るは、また極めて罕れ稀なり」

謹慎、「かく時々其の煩悶の消え失するやう思はるゝは、そも亦何の助けにか依ることならん、卿は之れを覺えらるゝにや」

基、「されば、彼の十字架の邊りにて見たる事どもを思ふ時此の事

以賽亞
ノ二十五
八、二十
一、四

の歌の八

あり。また此の續ある上衣を打ち眺むる時此の事あり。さては又我が行かんとする方を思ひて心の熱する時此の事あるを覺ゆるなり。

謹慎、「斯ほごまでシオンの山に行かんと望まるゝは、如何なる仔細のあることやらん」

基、「そは云ふまでもなき事なり。先づ我身の望は十字架に懸りて死にたる者、なほ生きて彼處に在るを見んことなり。また我身は今日までも身に着き纏へる凡ての苦惱の彼處にて取り去らるゝを望むなり。げに彼等には死と云ふ者なく、また我が最も好む友ごちをも得て、之れと住むことを得べしと云ふことなり。あゝ誠に我が心の程を云はんには、我身は重任の苦を安められしに依りて、深くも彼の君を慕ふにより、また心の病ひによりて全く疲れ果てたるより、何卒彼處に到りて最早や再び死ぬることなく、且つ良き友人と共に在りて、「聖なるかな、聖なるかな、聖なるかな」と常に喜び歌はんこ

とを願ふなり」。

其時仁愛も言葉を添へ、基督信者に向ひて云へるやう、「卿は妻を有たれずや、また家族とては有たれぬにや」。

基、「我身は妻と四人の幼なき者を有てり」。

仁愛、「さりとては何とて連れ立つことを爲られぬやらん」。

之れを聞きて基督信者は思はずほろ／＼と涙を落せしが、やがて

又云ひ出でけるやう、「あはれ／＼、彼の者ども一人として我身に從

ふ者なく、心底より我が旅立に逆らひたり。まかも我身は眞に喜こ

びて伴なはんところ願ひし者を」。

仁愛、「元より卿は彼の人々に語り聞かせもし、また留まることの

危ふさをも説き示めしは爲されしならん」。

基、「それは固よりなり。また我が城下の滅亡ぶべき事につき、神の

示し給ひぬる事共をも語り聞かせしが、却つて戯むれ言と視爲され

四九〇 創世十

て、さては中々聞き入るべくもあらざりしなり」。

仁愛、「其時卿は神に祈りて、その勧誘の能く妻子の心に入らんや

う求められしや」。

基、「さなり、心を盡して祈りたり。實に憚りある事なれど、我

身は妻と彼の顔は是なき者どもを殊の外に愛し居たれば」。

仁愛、「卿の目には其の滅亡の事も充分明らかなりしやう思はる、

に、卿は其の恐怖と又自からの悲嘆などにつきては、別に語らるゝ

ことも爲られざりしにや」。

基、「いや、繰り返へし、繰り返へし、亦繰り返へしても語りつる

なり。また、我が顔は恐怖を帯び、我が眼には涙溢ふれ、且つやが

て我等の頭上に落ち懸らんとする審判の懼ろしさに身震るひして在

りしことなれば、其の態を見てだに知らるべかりしも、猶ほ彼の者

どもを説き伏せて連れ来るには不充分にてありつるなり」。

仁愛、「さりごと彼の人々の來るまじと云へるには、また如何なる據りどころの在りけるやらん」

基、「さればなり、妻は浮世を見棄つるを嫌ひ、小供等は亦慕なき幼な遊びにたわい無く、かくて彼れや此れやにて、我身は唯だ一人見捨てられ、斯かる姿にて彷徨へるなり」

仁愛、「されど亦、折角言葉にては連れ立つやうに誘ひ置きながらも、卿の仕打ちの做大なるより、却つて彼の人々の氣を喪はせしやうのことは無かりけるにや」

基、「げに實に耻かしき次第にて、自から我が舉動の錯まてりしを思ひ知るなり。且つ如何に良き事を他人に説き勧むることも、其の行為之れに伴はざれば、折角の骨折りも忽ち無駄となり果つること、之れまた我身の能く知る處なり。まかはあれど、我身が自からの不似合なる仕打ちよりして、其の氣を逆らはすやうの事も無かれかし

最明の注意
も、清むむ、
の、
の、

二書三ノ十一

九三ノ十

と、甚く意を用ゐたりしは實なり。まことや其の事に依りてこそ、却つて我身は餘りに鹿爪らし、と笑はれ、また妻子の爲めにとて身を制することを爲れば、そは亦役にも立たぬことなりと云はれつるなり。さては亦我身が、神に對して罪を犯すまじ、隣人等に對して悪しき事は露爲すまじと思ふの餘り、心最と優しく且つ兢々しく爲りたることも實なり。されど斯かる舉動によりて其の妨げを起したりとせば、そはまた是非もなき次第ならずや」

仁愛、「げにや昔しカインが其の兄弟を殺したりしも、己れの行なひし所は悪しく、兄弟の行なひし所は義しかりし故なり。されば卿の妻子等も斯かる事の爲めに逆らひたりとならば、そは其の人々が善に移ること叶はざる証しにて、また卿の靈魂が其の血統より解き放されたるを顯はすなり」と打ち語る。

さて我れ夢の中に見けるに、かく交はる代はる語り續けて在りし

四二〇 希伯來

程に、やがて晩飯の支度も整ひしかば、皆な又席を新ためけり。さて食卓の上には甘き酒また佳き品々ありて皆な快く之れを取り、且つ談話にも移りしが、此度は重みに處の主の噂にて、乃ち其の主の爲されしこと、又其の爲されし事の由來、さては此の家の建てられたる緣故などを語り合へり。我れ彼の人々の云ふ處に依りて、其の主が猛き勇士なりしこと、及び死の權威を持てる者と戦ひて之れを殺せしことの由を會得したり。而も其の身に非常なる危難を受けながらも之れを爲せりと聞きて、益す其の主を慕しき人に思ひたり。

其時基督信者は言葉を夾みて之れを頌へ、「げに皆々の云はるゝ如く、また我身の信する如く、主は多くの血しほを流して此の事を爲し給へり。あつばれ其の爲せし事に芳ばしき榮光の充ちて輝やくなるは、之れ全く其の國を思ふ真心の愛より出でしに依ることなり」

九後八ノ 哥林多

と云へば、家内の誰れ彼れも之れに繼ぎて、或るは主が十字架の上に死なれて後ちも彼等と共に在し、また言葉をも交へられしことを語り、或るは亦、主は天が下に絶えて類ひもあるまじき程、憐れなる浮世の旅人を愛する者にて在はせし由、親しく主の口より聞きたりと打ち語る。且つ其の事の例なりとて、主が貧しく頼りなき者を顧りみる爲め、自身の榮えを脱ぎ捨てしこと、また之れを思ひてはシオンの山に己れのみ棲みて居るを願はざる由、是れまた親しく其の陳べらるゝを聞きたること、さては又、主が數多の旅人を擧げ、其身は元來塵芥にて生れつき乞食なりし者をも、猶ほ改めて王公と爲し給へる事など打ち語れり。

かく語り續くる程に夜も甚く闇けぬれば、一同其の主の保護を祈りて、各自臥床に退きけり。さて基督信者は最と廣き高樓の部屋に請せられしが、是處は其の名を平和の間と呼び、其の窓は東に向ひ

て、遠く日の出をも眺めつべし。此くて東天紅の頃ほひ迄も打ち眠り、其時目さめて歌ひ出でたり。

「主の憐れみの深ければ

愛き旅人も頼みあり、

此の高殿の高ければ

天つ御國ぞ近からん」

さる程に夜も明け渡りて衆人起き出で、亦もや昨日の物語りなど續けし後ち、今暫し緩りと逗留して、此の家に秘藏する珍奇しき品々をも見て行かれよとて、先づ書齋に伴なひ行き、太古以來傳はれる記録の類ひを示したり。其の中には處の主の系圖ありて、主は始めなく終りなき系統より出で、日の老いたる者の子なりと録されありしやう、我れ夢ながらに覺ゆ。此處には亦主の爲し遂げられし其の事業や、其の爲めに主が撰びて使はれし幾千の人の姓名や、また

*録此の指約
以て之を指約
す下之を指約
たに無きしれ
を讀みしれ
人の味はらひ
薄の味はらひ

主が其の人々に與へて棲はしめらるゝ住處は、げに物變はり星移るとも、絶えて朽ち破ぶるゝ者にあらざることなど、委しく書き留めたる記録もありたり。

次に其の人々が主に使はれし功績ある働らき振りなりとて、彼等が其の王國を擴張めしこと、義しきを行なひしこと、約束の物を得たりしこと、獅子の口を箝みしこと、激しき火焰を消し止めしこと、劔の刃を脱かれしこと、また弱き者強くせられて、戦ひに勇み立ち、遂に異邦の敵を破りしことなど、其の節々を読み聞かせたり。

次に亦此の家の事を書き載せたる記録の一部を繰り開き、其の主の仁恤篤くして、誰れにもあれ、實に何者にもあれ、たとへ過ぎ越し方には如何ほど主を窘しめ、又其の言行に逆らひたる者にてもあれ、主は猶ほ悦びて之れを迎へ入れ給ふ由をも讀み聞かせたり。此の書齋には其の他有名なる歴史本數多くありて、基督信者は一々

之れに目を注めしが、多くは孰れ有名なる古今の出来事にて、或ひは預言あり、又識言あり、皆な確かに應ずる處ある者なれば、敵の爲めには恐怖となり驚嘆となり。玄かも旅人に取りては慰藉となり喜悅となるべき事などを書き載せたり。

さて其の翌の日は又武器庫に案内せられしが、是處には主が旅人に備へ給ふ武器なりとて、聖靈の劔、信仰の盾、救の胃、義の護胸、また各種の騰告と云へる武器、並びに長く壞るゝことなき福音の履など、その類ひ充ち満ちたり。げにや主に仕ふる者の數、大空の星の如くに多かるとも、悉皆く武裝ふに足るべしと見られたり。

さて亦、主の従僕等が之れを取りて、驚ろくべき事を仕途ほせたる其の器具なりとて、先づモーセの杖、及びヤエルがシセラを仕止めたりてふ鎚と釘子、並びにギデオンがミデヤンの軍勢を敗りし時に用ゐたる、號筒、空瓶、また燈火など、次にシヤムガルが六百人

を打ち殺したる牛の策、次に亦サムソンが之れを以て一千人を撃ち殺し、屍の山を築きたりと云ふ驢馬の腮骨、さては亦ダビデがガテのゴリアテを打ち殺したる石と投石索、並びに主が其の日に到りて震ひ起ち給はんとき、罪人を屠ふり給ふべき一口の劔、其の他なは種種の勝れし者をも示されしが、基督信者は見る物ごとに目を驚ろかせ、深く心に喜こびたり。さて斯くなし果て、皆なく再び休憩に入りたり。

さる程に我れ夢の中に見けるに、愈よ翌の朝ともなりければ、基督信者は疾く起き出で、打ち立たんと爲したりしを、彼の人々は更に之れを止め、若し天氣も麗朗ならんには、可懐の峯と云ふ山を見すべきに、枉げて今一と日は滞在せられよと勸めてけり。また彼の峯は是處よりも一層天の都に近きことなれば、之れを見る歡喜も亦一入なるべしと云はるゝに、基督信者も心落ち居て留まりけり。

以賽亞
三十三
七十六
十

馬太
三十二
十

さて晨の空うらくと晴れ渡る頃、人々は基督信者を伴ひて高殿の頂きに登り、あれ見られよと云ふまゝに、基督信者目を擧げて遠く南の方を打ち眺むれば、まことや樂しげなる峯々立ち連らなれる中に、最と晴れやかに麗はしき山郷あり。泉清らかに森青く、木の實茂くして葡萄の園も亦た豊かに、さては千種の花の咲き亂れたる、其の景げに懐かしとも懐かしき限りなり。されば基督信者願りみて其の里の名を問へば、「あれこそインマエルの郷なれ、げにも」と云ひさして人々更に言葉を繼ぎ、「彼の郷は此の時と等しく、すべて旅人の道筋にて、又其の爲めに供へらるゝなり。さてまた卿彼處に到りなば、處の牧者たち必らず卿に示すべきに、彼處より天の城門を見ることをも得らるべし」と打ち語れり。

さて基督信者今は愈よ發足せんと思ひ立てば、人々も左までは止めず、されど先づ今一度武器庫に行かるべしとて、基督信者を

伴ひ行き、さて堅固なる甲冑を取り出で、道中にて如何なる者の襲ひ來るも計り難しと、之れを其の上に打ち被せたり。かく身を固め了りて再び人々に伴はれ、彼の門前に立ち出でしが、さて門衛に打ち向ひ、「もし旅人の通ることも有らざりけるにや」と問へば門衛は領づきて、「されば一人見受けたり」と云ふ。

基、「さて、卿は其の人を知らるゝにや」。

門衛、「其の名を尋ねたれば、忠信と云ふ由名乗られたり」。

基、「あゝ其は我が知人なり、玄かも同じ郷人にて近き隣り同士なり。げに彼れも我が故郷より來れるなり、さりさては左まで遠くも行くまじくや」。

門衛、「されば今頃は時を越えたる時分なるべき」。

基、「げにや門衛どのよ、卿の親切いと有り難し。願はくば主常に卿と共に在し、其の祝福卿の上に彌や多かれ」。

かく云ひて愈よ出で立ちしが、信心、仁愛、謹慎と聰明の四人は峠の麓まで見送るべしとて打ち連れ立ち、前の物語りを繰り返へしち、下り行けり。其時基督信者振り返りて、「げに登りは困難なりしが、下りとても同様危ふく覺えらるゝよ」と云へば謹慎は之れに答へて、「まことに云はるゝ通りなり、脚に限らず誰れ人にも、此の坂路を傳ひて、かの下なる謙遜の谷に下り行かん、途中にて一歩も滑り過まつこと無からんは極はめて困難なる次第ぞかし。さればこそ」と云ひさして又言葉を添へ、「さればこそ我等も斯くは脚に伴ふなれ」と云ふ。かくて基督信者は愈よ進み下りしが、まことや最と意を配りつゝも、猶ほ一度ならず二度ばかりは滑りたり。其時我れ夢の中に見けるに、基督信者漸やくにして全く麓に達せしかば、かの良き連れの人々等は、食物飲料また乾菓物など之れに與へて別れを告げ、基督信者はまた其の道を續けてけり。

「うれしや、潔き友の真情

語らふ程は憂愁を忘れ、

かくて別れて一人し行けば

猶ほ芳ばしき其の饒別に

甲冑を添へて我が身を固む。」

第四程

世を渡る旅のあれ野の明け暮れに

天つみその、春をしぞ思ふ

さる程に、基督信者は此の謙遜の谷に入りて、憂たてくも亦一つの辛き目に出で遇ひたり。そは未だ幾程も行きやらざる處に、早くも一個の悪魔現はれ出で、野原を越えて渡り来るを見てけるなり。

此の悪魔はアポリオンとて其の名を知られし者なりしかば、基督信者は忽ち恐怖を催ふし、また逃げ返へらんか、踏み止ごまらんか、心に惑ひ始めたり。されど己が背面には何の武器をも着け居らざることを思ひ返へし、斯くては敵に背後を見せんこと益ます覺束なく、敵に取りては其の投槍もて我れを突かんに愈よ便宜の事となるべし、さらば何處までも踏み止ごまりて、力の限り防禦がん者と獨り心を定めたり。さるにても一途に其の生命を助からんとならば、踏み止まりて戦かふより外に途なしと、早くも思案をしてけるなり。

かゝれば基督信者進み行きて、愈よ彼のアポリオンに出で遇ひたりしが、さて此の怪物の態を見るに、其の凄まじきこと譬へんに者なく、身には悪魚に似て其の恃みとする鱗介あり、また龍蛇の如き翼と熊の如き足を備へ、其の口は獅子の口に似て、火焰と煙り其の腹より湧き出でたり。やがてアポリオンは基督信者の前に近づき、

さも蔑視みたる顔付にてしげくと見てありしが、さて之れに向ひて問ひ出でけるやう、一卿は那方より又那方に行かるゝや。

基、「我身は滅亡の城下とて、在らゆる罪惡のある處を立ち出で、唯今シオンの都に上る途中なり」。

アポリオンは之を聞きて忽ちに言葉を荒らげ、「さては汝は我が臣民の一人ならずや。かの城下は一切我が有にて、我れは其の王また其の神なるぞや。然るに汝その王を捨て、逃げ去るとは何事ならん、今汝をひと撃に叩きのめすは最と安けれど、我れは汝が其の心を悔い改ためて、再び我れに仕へんことを望むなり」と云ふ。

其時基督信者も亦聲を勵まし、「我れは汝の領地に生れたるに相違なし。されど汝の使ひ方酷なる上に、汝の與ふる貨銀にては誰れ人も其の生命を支へ難し。そは罪惡の貨銀は死なりとあればなり。さるからに我れも漸やく年長けたるより、他の分別ある人々に倣ひ、

もしや我が身上を改たむる事をも得んかと、心を配りて其の道を探めしなり」。

アポリオン、「いづれの王にもあれ、斯くむざむざと其の臣民を失なはん者はあるまじ、我れとても中々汝を失なはじ。さて亦仕事と賃銀に不服なる由、その事ならば心を安んじて歸り行けよ、何なりとも我が國に在らん限りの物は皆な誓つて汝に取らすべきぞ」。

基、「そは駄目の事なり、我れ已に他の王、乃はち諸ろの公の公なる者に此の身を捧げたれば、今更ら歸へり行くべしなど、義に依つて思ひも寄らず」。

アポリオン、「げに汝の爲せる處は、かの『熊の穴を遁れて獅子の洞に匿る』と云へる俗諺の如く、小悪より大悪に移る仕方なり。されど我れこそは彼の王の臣僕なりなど自から公言する輩儕も、多くは時の間に彼の者を出しぬきて、再び我が方に歸へり來るが常習なり」。

り、汝も亦その如くせば實に宜しからん」。

基、「我れは彼の公に我が信心を奉つり、また我が忠義をも誓ひたり。されば如何なることありとも、いかで汝の方に返へることを得ん、若しまた然ることあらんには、反忠の者として忽ち首打たるの外はあるまじ」。

アポリオン、「汝は我れに背きてこそ不忠をば爲したるならずや。されど今にても汝再び立ち返へりて我れに來らば、我れは悉皆く汝を赦し見のがすべきぞ」。

基、「我が汝に従がひたるは幼少の時の事なり、之かるに今我が頼みて其の旗蔭に身を寄するなる我が大君は、其の機能にて我れを汝の手より釋き放ち給ふべく、また我が汝に従がひて爲しつる事共をも赦し給ふべしと考ふるなり。さてもく、汝、人を滅ぼすアポリオンよ、打ち明けて云はんに、我れは汝よりも遙かに彼の君を好むな

り。其の仕事、その貨銀、その臣僕、その治め方、其の朋輩、また其の國、すべて此の君の方道かに勝りてあるなり。げに我れは其の臣僕なり、我れは必らず此の君に従ひまつるべし。さらば最早や我れを説き伏せんとすることを思ひ捨てよ」。

アポリオン、「今少しく落ち着きても思ひ見よ、此の道を行かば猶ほ汝如何なる者にか出で遇はんとするぞ、さても彼の者の臣僕等は畢竟我れに逆らひて我が道を犯す者なるに依り、多くは其の終りを完うせざること汝の能く知る處ならずや。げに耻かしき最後を遂げたる者幾干ぞや。且つ汝は我れに仕ふるよりも彼の方勝れりと云へど、是れ亦能く思ひても見よ、彼れは其の臣僕等が斯かる憂き目に遇へるときも、之れを助けんとて其の居る處より出で來りしこと曾てあらず。然るに我れに於ては普ねく世の人の知る如く、我れに忠義を盡す者にして彼の者どもに捕らへらるゝことあらば、直ちに機

威を振るひ、或ひは詐偽の計事を用ゐて、之れを其の手より救ひ出だせしこと幾度ぞや、されば我れ又汝をも斯く助けやるべし」。

基、「我が君が今直ちに其の臣僕等を救ひに來られざることは、却つて目論のある次第にて、實は彼等が終りまで其の忠義を立つるや如何にと、忍びて其の信仰を試ろみらるゝなり。また非業の最後と汝は云へど、實は之れ亦彼等に取りて此の上もなき面目なり。彼等は現在の助けに多く望を措かず、唯だ彼の大君が其の榮光と天の使の榮光とを以て來らるゝ時、彼等も之れに與かりて其の榮えを受けんと待ち設くれればなり」。

アポリオン、「さても汝は既に彼の者に不忠を致したり。かくても猶ほ其の報酬を得べしと思ふや」。

基、「なに、アポリオンよ、我が不忠とは何事ぞや」。

アポリオン、「先づ汝は旅立の始めに當り、已に彼の落膽の沼に溺

れんとして早くも其の志ざしを落せしにあらすや。また汝はかの重荷を脱せんとして焦心るのあまり、主が之れを取り去らるゝまで待つべき筈なるをも構はず、求めて悪しき道に入りたるに非ずや。また汝は浅ましくも打ち眠りて其の最も良き物を失なひたるに非ずや。猶ほ亦汝は獅子の姿を見て已に逃げ返へらんと心引かれしに非ずや。さてもし、汝は道中の物語りや又聞きもし見もし爲たる事などを語る度びごとにも、其の話しより其の所作より、共に何とやらん誇りがにて、實は私かに空しき譽れを求め居るにあらすや」。

基、「それは實に一言なし。猶ほ其の他汝の言ひ残したる者も無きにあらず、されど我が崇め仕ふる君は慈悲深くして容易に赦し給ふなり。且つ亦是等の弱點は汝の國にて養ひ受けたる者なるをや。されば我れ甚く之れが爲めに呻き悶へ、また悔やみ嘆きたるにより、我が君の赦免を蒙むることを得たり」。

其時アポリオン激烈しき憤怒りを現はし、「我れは其の王の敵なるぞ、我れは其の爲人を憎み、其の律法を憎み、また其の人民を憎むなり。げに我れは汝を阻たげん爲めに來れるぞ」。

基、「慎しめよアポリオン、今我が立つ處は最も聖き主の大路なり、げに心して慎しめよ」。

アポリオン之れを聞きて忽ち途も狭しと立ち跨がり、「何の慎しむ恐るべき事かあらん、最早や言葉も無益なり、我れ今奈落の底に誓ひを疊みて、汝を是處に打ち果たし、其の魂魄を脱ぎ捨て呉れん、いざ死ぬる覺悟をせよ」。

かく云ひも果てず早や基督信者の胸先を目がけて、火の燃ゆる投槍を打ち懸けたり。されど基督信者は手に彼の盾を持ちし事なれば、直ちに之れを受け止めて其の危難をば防ぎてけり。

其時基督信者も今は早や之れまでなりと抜き放ちしかば、アポ

リオンは益ます暴れて打ち向ひ、雨霞の如く其の投槍を投げかくるに、此方も力の及ぶ限り防ぎしが、いつしか其の頭と手足に數ヶ所の傷を蒙りて打ち萎む。之れを見てアポリオン得たりと斗り付け入れば、基督信者も亦氣を勵まし、再び勇ましく立ち向ふ。かくて戦かふこと半日あまり、其の戦かひ最と劇しくして遂に基督信者は力盡きたり、げに多くの傷手を負ひたれば次第々々に弱わりたるなり。

アポリオンは又此の機會に付け込みて、急に基督信者に組んで掛り、一と振り振つて彼れを大地に投げ付けたれば、基督信者の劍は脆くも其の手を離れ落ちたり。アポリオンは之れを見て、「汝の命すでに我が手の中にあり」と呼ばりつゝ、又も怪力にまかせて押し付くるに、あはれ此方は今や息も絶えたるなる斗りとなれり。されど神の聖意に依りてなるべし、今しもアポリオン槍振りかざして此の

●米迦七ノ八

●羅馬八ノ三十三、三十四、三十五、三十六、三十七、三十八、三十九、四十

善人に止めを刺さんとしたる時、基督信者は敵くも手を延べて落ちたる劍を拾ひ取り、「あゝ我が敵よ、我れにつきて喜こぶなかれ、我れ倒るれど亦起き興るなり」と云ひつゝ、之れを刺し貫ぬきしが、正しく手ごたへしてアポリオンは深傷を受けたる者の如く飛び退きたり。之れを見るより基督信者奮ひ起ちて再び之れに打つて懸り、げにや我れらを愛くしめる者に頼り、すべて之れらの事に勝ち得て餘りあり」と呼ばれば、アポリオンは忽ち龍の翼を擴げ、何處ともなく飛び去りて再び見えなかりたり。

此の戦かひのありける間、始終アポリオンが放ちたる吼ゆるが如き叫び聲と、また悪龍の如く物云ふ態の凄まじかりしこと、それに引き更へ、基督信者が其の心の底より漏らせし嘆息と呻き聲の悲しげなりしことなどは、我れと等しく見聞しつる者ならずば、到底も想像し難かるべし。さても諸刃の劍を以てアポリオンに確たか重傷

を負はせしとき、天を仰ぎて打ち微笑みたる其の顔ばせの嬉しげなりしこと、げに我れは此の時までも基督信者の顔に斯く斗り晴れたる影の浮びぬるを見しことなし。さても亦此の時の景ほど恐ろしきものを見しこともあらざりけるなり。

されば愈よ戦ひの終りし時、基督信者は靜かに天を仰ぎ視て、「あゝ獅子の口より我れを救ひ給ひし主、またアポリオンを拒ぎて我れを助け給ひし主、われ今我が主に感謝を捧げん」と云へり。かくして亦歌ひ出でけるやう、

「讃むべきかな 主の御名

どこしへに たへん。

圍める敵を切り拂らひて

我れを守りにし諸刃の劍、

忠義は固き身の甲、

あした夕べに我れを願ふ

主の恩愛ぞありがたき。」

其時那處ともなく一とつの手出で來りて、生命樹の葉幾片かを與へしかば、基督信者は之れを受けて彼の創傷に推し當てしに、其の傷即刻に癒やされけり。且つ最前貫らひ受し食物を取り、また飲物をも用ゐつゝ憩ふ程に、漸やく元氣をも得てければ、再び支度して立ち出でしが、此度は拔劍のまゝを携さへたり、そは他の敵の猶ほ近くに在るやも知れずと思へるなり。されど此の谷間にてはアポリオンの外更に刃向ひ來る者もあらざりけり。

さても此の谷の盡くる處に亦一とつ谷あり、其の名を死の蔭の谷と云ふ。天の都に到る道筋其の真中を通りけることなれば、基督信者は是非とも是處を行くべき筈なり。此の谷は極めて寂寞しき處にて、彼の預言者エレミヤが言葉にも、「曠野なる地、穴多くして荒

れたる地、早きたる死の蔭の地、(信者の外は)人の過ぎざる地、また人の住はざる地を通ほらしめ、と記されたる處なり。

さる程に基督信者は愈よ亦此の谷に入りて、前にアポリオンと戦かひける時よりも、猶ほ悪しかるべき憂き節に出で遇ふこととなりてけり。

其時我れ夢の中に見けるに、基督信者進み行きて死の蔭の谷境ひに達せしとき、端なくも二個の人に邂逅ひたり。此は昔し善き國の事を悪しざまに云ひ觸らしたる人々の子孫にて、今しも忙わたいしく馳せ返へる處なり。されば基督信者之れに向ひて、「卿等は那方に向かるゝや」と呼びかけたり。

兩人、「後戻り、後戻り 卿も平和と生命の惜しくば、我らと共に後戻りせられよ。」

基、「そは亦何事ぞや」

十三民歌記
此の趣味甚
だ引照す
り要す

四詩四十
九ノ十

兩人、「何事ぞや、されば我等も卿の行かるゝ如く此の道を行きて、堪へ得るかぎりに進みたり。まことや已に歸ること出来まじくなりたる程進みたりしが、さつても今一と歩深入りしたらん者ならば、到底も卿に此の趣むきを語るにすらすら出来ざりしならん」

基、「さりどては如何なる事に遇はれしぞや」

兩人、「さればなり、我等は大よそ死の蔭の谷間まで行きたりしが、まだ其の中に落ち入らぬさき、僥倖にも不圖行程を眺めやりて危難のあるを見て取りたり」

基、「如何なる事を見たりしぞや」

兩人、「見たりしとや、されば先づ谷と云ふ谷よりして其の聞きこど墨の如く、其中には底なき淵ありて、妖怪、變化、悪蛇の類ひ出沒せり。また怪しき呻めき聲其の中に充ち、さながら酷たらしき呵責に遇ひて、怨めしげに泣き叫ぶかと疑がはる。また物凄き雲其の

上を亂れ掩ひ、死の蔭も亦常に之れを包めり。げに云はん方なく亂脈にて、恐ろしども恐ろしき極みなり。

基督信者之れを聞きて借て云ふやう、「卿等の云ふ處さもあるべけれど、之れ我が志さす方の道すぢなれば是非もなし」。

兩人、「卿行くとならば一人行かれよ我等は最早や斷念なり」。

かく云ひ棄て、兩人の者は別れ去り、基督信者は又其の道を進みしが、猶ほ何者の攻めかゝるやも計られずと、やはり抜き放ちたるまゝにて其手に劍を携さへたり。

其の時我れ夢の中に見けるに、此の谷の右手に最も深き溝ありて谷の續ける限り之れに沿へり。此は古しへより盲者が盲者の手引きして之れに落ち入り、さては諸共に痛ましき最後を遂ぐると云ふ處なり。また其の左り手には最も危ふき泥地あり。善人たりとも一度び之れに踏み入らば、底深うして足の立ち度を失なふべし。昔し

ダビデ王も此の泥地に落ちたる事なるが、もし全能なる者の救ひ出すこと無かりしならんには、必らず其の中に沈み果てたりし事なるべし。

さて亦是處は道すぢの極はめて窄きに、憐れにも基督信者の難澁一と方ならず、闇を辿りて彼側の溝を避けんとすれば、あはや此方の泥地に轉び入らんとし、また泥地より遁るゝことに氣を取らるれば、うたてや其の身は早や右の方に落ちなんどす。かくて辛くも進み行きしが、行く行く數多度び苦しげなる嘆息を漏らしたり。そは此の難儀に添へて道の暗さ云はん方なきに、幾度か進まんとして擧げたる足の踏み度を失ひ、まことに途方に暮れたればなり。

我れ此の谷の中程なる處に、地獄に通ふ入口ありて近く此の道沿に立てるを見たりしが、其中より絶えず電光と凄まじき音を混へて、黒煙りと火焰との沖ばしり出づるさま、夥多しなんど云はん斗

詩百四十
六所六
以弗十八

りなし。基督信者は之れを見て、(斯かる者は前のアポリオンとは事
 變はれり、基督信者の劔も其の甲斐なければ)、此は亦如何にせば可
 からんと考へつゝ、やがて劔を其の鞘に收め、更に各種の祈禱と云
 へる他の武器を取り出で、之れを其の備へとして大聲に打ち呼ば、
 り、「あゝ主よ願はくば我が靈魂を救ひ給へ」と云ひたるやう我が耳
 に聞こえたり。

斯くて進み行くこと久しかりしが、猶ほも火焔は其の身に近く追
 ひ掛り、且つ亦恨めしげに哭き呻めく聲につれて、何者とも知れず
 此方彼方に激しく馳せ違ふ音さへ聞こゆれば、さては片々にや引き
 裂かれん、また巷の泥の如く踏みも踏られんと、幾度びか思ひ迷ひ
 て安き心地もあらざりけり。斯くも恐ろしく亦凄まじき中を辿るこ
 と二三里ばかり、やがて亦一とつの處に至りて、鬼の群の此方に向
 ひ来るに出で遇ひければ、また立ち止まりて思案に暮れ始めたり。

詩七十
六ノ十

げに其の心は半ば歸へらん方に傾むきしも、再た思ひ返へせば谷と
 ても早や既に半ば過ぎたり、また是處まで來たるには實に數多の危
 難にも打ち勝ちたる事なり、かくては進み行かん方よりも更に歸へ
 り行かん方に危険の多きや知るべからず。さらば愈よ進み行くべし
 と思ひ定むる程に、鬼の群は益ます此方に近づきたり。されど今し
 も既に其の身に取り付かんとせし時、基督信者最と烈しき聲を揚げ、
 「われは主エホバの大能の事跡をたづさへゆかん」と呼ばりければ、
 鬼は忽ちに引き退きて最早や近寄らずなりてけり。

猶ほ一とつ茲に語り漏らすまじきことあり、そは此の時憂たてく
 も基督信者の心甚く亂れて、他の聲が己れの聲かどさへ辨まへぬ程
 になりたるを見受けしことなり。さても彼の地獄の入口を通り越え
 んとせる折しも、後ろより惡鬼の一個忍びやかに躡り來り、忌々し
 くも神を漬がす數多の言葉を並らべ立て、其の耳元に囁やきしが、

基督信者は全く之れを己れの心より出で來れる聲なりと思ひ僻め、
 今まで出遇ひし事々に勝りて痛くも心を惱めたり。げに此の時まで
 も切に愛し慕ひたる其の主を、かく淺ましくも自身瀆し罵しるに至
 りたるかと思ひしなり。此は遁れんとせば遁るべかりし者を、さり
 とては耳に手を當つるの分別も出でず、または其の瀆言の出所を辨
 まへんとする思案とても浮ばざりけるなり。

斯くも悞懣き姿にて基督信者は稍や久しく辿り行きしが、たまた
 ま向ふの方に行く人ありと覺しくて、「たとひ我れ死の蔭の谷を歩む
 とも禍害を恐れじ、なんぢ我れと共に在せばなり」と云へるやう其
 の聲ほのかに聞こえたり。

さらば基督信者は之れを聞きて、先づ神を畏るゝ人々の猶ほ我れ
 と等しく此の谷に在るを知り、次に斯く暗く物凄き中にも已に神は
 彼等と共に在し給ふ、されば亦、よし此の場所がらの阻礙に依りて

三ノ四ノ

約百九ノ十一

五ノ八ノ

明らかに見まゐらすることなくとも、神は我れと共に在さる筈
 は無からんと思ひ、又一つには（若し追ひ付くことを得ば）やが
 て道連れをも得るなるべしと望みを起して、心頻りに喜こびたり。
 さる程に基督信者は進み行きて、前なる人を呼び掛けしが、彼の
 人も亦此の谷には自身の外に人もあらじと思ひけるにや、絶えて答
 ふることゝ爲さざりけり。其の間に夜はほのく、明け渡れば、基
 督信者は之れを見て、「あゝ主は死の蔭を變じて朝となし給へり」と
 云へり。

さて愈よ朝ともなりければ、基督信者は後方を振り返へり、固よ
 り歸へり行かんの意にはあらず、唯だ闇を辿りて過ぎ越せし憂き跡
 を吊らはいやと打ち眺めたり。げにや彼の左手に沿ひたる深き溝、
 また右手に横たはれる彼の泥地、さては其の間に夾まれたる彼の道
 すぢの狭まさなど、最と歷々と見られたり。また彼の妖怪、變化、

約百二十

惡蛇の類ひは、夜明けの後は近づくことなければ、皆な遙かの方に退ぞき居れど、猶ほ『主は暗き中より隠れたる事共を顯はし、死の蔭を光明に出し給ふ』と記されたるに適ひて、悉皆く彼れの眼に顯はれ居たり。

斯かれば基督信者は其の淋しき道筋にて、凡ての危難より斯くも救ひ出だされし嬉しさを、また今更らの如く深く心に感じてけり。げに今までも此の危難を恐れざりしには非ざりしかど、晨の光りに照らされての後は、益ます明らかに思ひ知りけるなり。さて其時旭日もさし上りて基督信者には又一とつ之恩恵となれり、さても死の蔭の谷は其の前方の半路かく斗り險はしかりしに、猶ほ行かんとする其の後方の半路は、行かるゝ迄も其の危ふきこと亦一段にて、今基督信者の立てる處より谷の盡き果つる其の際まで、こゝには囹圄、機檻、係蹄、また羅網など、かしこには凹所、陷阱、深きは

約百廿九

穴、また傾斜の個所など、其の道到る處に充ち満ちたり。されば前の半路を來ける時のやうに今猶ほ暗黒にてありもせば、たとへ千の生命を有ちたりとせんも、必らず其の一とつをだに全うするを得ざりしならんを、幸ひにして今は旭日も昇りたる事なれば、基督信者は亦聲を揚げて、『あゝ主の燈火わが首の上に輝やき、彼れの光明に依りて我れ黒暗を歩みたり』と云へり。かくて此の光明に依りて遂に谷の出口に達してけり。

さて我れ夢の中に見けるに、此の谷の盡きなんとする處に、血しほ、骸骨、また骨灰、さては多くの人の屍、其の中には昔し此の道を通りたる旅人の亡軀も打ち混りて、夥多しく横たはれるを見たり。さるにても此は如何なる仔細なるべきとつらく思ひ回らす折しも、ふと我が邊り近く一とつの巖窟あるを見出でたり。是處には其の昔し二人の巨漢住めり、其の一人は羅馬法王（ポープ）にて、今一人

は偶像教の本尊（ペーガン）なるが、此の兩個の者猥りに其の權威を振ひ、また暴虐を逞ましうせしにより、それが爲め多くの人々迫害を蒙りて無残の最後を遂げたることあり。げに是處に横たはれるも皆な其の人々の血しほ又骸骨などにてありけるなり。然るに基督信者は是處にさしかりしも左るべき危難もなくして通り過ぎたれば、我れは又聊さか不審を起せしが、やがて後に至りて能く其の仔細を悟り得たり。そは「ペーガン」の方は年久しき前既に死し、「ポープ」の方は今猶ほ生き存らふると雖ども、是れまた齡漸く傾むき、且つ其の血氣盛んなる頃、數多の烈しき戦かひに出で遇ひたる餘波とて、今は全く衰弱し、また其の手足も不自由になり、最早や何事を爲さん事も叶ひがたく、唯だ僅かに巖窟の入口に坐り居て、旅人の通行するを見ては怒り罵しり、さりどて之れを捕らへんことも意のまゝならねば、愈よ切齒して憤ふるのみなりけり。

斯くて我れ見けるに、基督信者は其の道を進み行きしが、愈よ此の老いたる巨漢の巖窟の入口に坐せる姿を見、殊には追ひかくることとは得爲ぬながらも、猶ほ此方に向ひて言葉を懸け、「汝等の心を改めさせん迄には、尙ほ汝等の多くを焼き殺さずばなるまじ」と云ふを聞きて稍や思案にも迷ひてけり。されど亦何の口答へもなさず、故意に大膽なる風を装ひて其の前を通り過ぎしに、更に害を受くることもあらざりけり。其時基督信者の歌ひ出でけるやう、

「あゝ我が君よ榮光あれ

あゝ主の御手を我れは讃めん、

危ふかりしは我が命

奇しかりしは其の救助、

行程の道は陰路の谷の

闇と艱難に包まれつ

罪惡の係蹄、陥罪、
身を圍みても在りけるものを」。

第五程

世を渡る旅のあれ野の明け暮れに

天つみその、春しをぞ思ふ

さる程に基督信者は愈よ其の途を續け行きて、今しも唯或る小高き處に達してけり、是處は旅人が其の行方を眺めん爲めの便宜にて、殊更らに築き立てられたる處なり。さるからに基督信者は其上に登り行き向ふの方を打ち眺むれば、同じ旅路に進み行く人影あり、之れ彼の忠信と云へる人なり。されば基督信者は大聲を揚げて、「オーイ、待たれよ、卿の道連れとなるべきに」と云ふ。



他人の信仰を察し、自ら慢る者必ず先づ倒る

十九の巻
三十三

其時忠信之れを聞きて後ろの方を振り向きしかば、基督信者はまた聲を揚げて、「待たれよ、待たれよ、わが追ひ着くまでは立ち止まりても暫し待たれよ」と呼ばりたり。されど忠信は止まざる氣色もなく、「いや、我が身は命がけなり、我が後ろには我が血を呑まんとする敵あり」と答へてけり。

基督信者之れを聞きて稍や心激し、忽ち有らん限りの力を盡して馳せ行しが、やがて彼の忠信に追ひ着き、猶ほ亦之れをも追ひ越して、かくて後なる者先になれり。其時基督信者は己れが其の兄弟を追ひ越したるより、いかにも之れ見よがしに打ち笑みたりしが、愚かにも自身の足元を慎しまざりければ、ゆくりなく躓づきて打ち倒ふれ、再び獨りにて起き上がることも叶はず、漸やく忠信の來るを待ちて扶け起されたり。

さて我れ夢の中に見けるに、其時兩人は最と睦ましく打ち連れ立

其時忠信之れを聞きて後ろの方を振り向きしかば、基督信者はまた聲を揚げて、「待たれよ、待たれよ、わが追ひ着くまでは立ち止まりても暫し待たれよ」と呼ばりたり。されど忠信は止ごまる氣色もなく、「いや、我が身は命がけなり、我が後ろには我が血を呑まんとする敵あり」と答へてけり。

基督信者之れを聞きて稍や心激し、忽ち有らん限りの力を盡して馳せ行しが、やがて彼の忠信に追ひ着き、猶ほ亦之れをも追ひ越して、かくて後なる者先になれり。其時基督信者は己れが其の兄弟を追ひ越したるより、いかに之れ見よがしに打ち笑みたりしが、愚かにも自身の足を慎しまざりければ、ゆくりなく躓づきて打ち倒ふれ、再び獨りにて起き上がること叶はず、漸やく忠信の來るを待ちて扶け起されたり。

さて我れ夢の中に見けるに、其時兩人は最と睦ましく打ち連れ立



他人の信仰を察して自ら慢る者必ず先づ倒る

ち、互ひに道中にて出で遇ひぬる種々の事どもを、さも面白く語り始めけるが、基督信者先づ其の緒口を解き出でけるやう、「さてく懐かしき忠信どのよ、我れは卿に追ひ着きたるを最と嬉しく思ふなり、さりさては神が我等の靈魂を調和へ給ひて、斯くも快よき道すぢに打ち連れ立つやうなされしこと、是れ亦喜こばしき限りならずや」。

忠信、「良き友よ、我れは最初より卿と連れ立たんことを思ひ立ちたりしが、其のうち卿は先きに城下を立ち去られしより、已むを得ず唯だ一人にて是處までは來りたり」。

基、「我が旅立ちにつれて卿が出で立たれし迄には、幾程の間をか滅亡の城下に住ごまられしぞや」。

忠信、「最早や住ごまり兼ねしに至るまでの間なり、げに卿の立ち去りてより忽ち巷説喧びすしくなりて、さては我らの城下が程なく

天よりの火にて焼き落さるべしなど、互ひに罵しり合ひたることなり」。

基、「さて、郷人等が斯く語り合ひけるとや」。

忠信、「さなり、一時は誰れとて此の事を口にせぬ者もあらざりし程なり」。

基、「さもありけるか、玄かるに皆な其の危難を遁れんとはせで、出で來れるは卿斗りとや」。

忠信、「げに其の評判は是處彼處に最と喧びすしかりつれど、確かに其を信じたる者はあらじと思はる。そは斯く語り罵しるが中にも、卿が事を嘲み笑ひ、また（卿の旅路をも侮ごり呼びて）彼の命知らずの旅立ちなど、云へるを聞けるなり。されど我身は我が城下の必らず硫黄と火にて焼き亡ぼさるゝことを確かに信じ、また今猶ほ信すればこそかく逃げ道を求めたるなれ」。

基、「卿は我が隣りなる無定見の事を聞かれざりしや」。

忠信、「まことや基督信者ごのよ、我れ之れを聞きたり、さても彼者卿に従がひて落膽の沼までは行きたる由、或る人々は彼れが彼處にて落ちたりと云ふれど、自身には其の事を人に知られまじと爲てあるなり。さり乍ら我身は彼れが充分落膽の泥に塗れたりしを覺るなり」。

基、「さて亦郷人等は彼の者に何と云ひけるやらん」。

忠信、「されば、其の歸へりしことに依りて彼の者は甚くも譏り嘲けられ、また誰れ彼れの差別なく皆な彼の者を戲弄の笑柄として、或は侮慢り且つ蔑視み、果ては皆な見向きもやらず、仕事さへも碌碌與へ呉るゝ者もなき様になれり。されば城下を立ち出でざりし其の以前に比ぶるも、今は猶ほ七倍の悪しき姿と成り果て居るなり」。

基、「さりどて彼れが捨てたる道とては、郷人等とても賤しめ捨つ

ることなるに、強がち彼の者のみを斯く責め苛なむ筈は無からん」。

忠信、「いや、人々は皆な彼れを指して、「之れを殺せ、此は貳心の者なり、此は其の言ふ處に實なき者なり」と云ひ罵しれり。あはれ神は斯く其の敵をさへ息捲かせて之れを排斥けしめ、かくて其の道を棄つる者の爲めに、一とつの懲戒を立て給ふなりと思はる」。

基、「卿未だ立ち出でざりし頃、彼の者と語られし事はあらずや」。

忠信、「されば、獨にて一度出で遇ひたる事ありしが、いかさま身の行爲を耻づる人のやうに、途の向ふ側を通りて我が方は偷み見るやうにして行きしかば、我身は終に物云ふことも爲さざりけり」。

基、「さて、初め旅立ちせし頃は、我れ彼の男に多く望を置きたりけるが、今は唯だ城下の滅亡と共に其の失せなんことを思ひやるなり。『犬かへり來りて其の吐きたる物を食らひ、豕洗ひ潔められて復た泥の中に臥す』と云へる眞實の古諺こそ、目のあたり彼れ

が身の上に適ひたるなれ。

忠信、「我身とても其の上を思ひやらぬには非ざれども、誰れか亦斯かる人の成り行きを遮るることの叶ふべき。」

其時基督信者更に言葉をつぎ、「さて他人の事は茲に止ごめ、いでや親しく我等の身の上を語るべし。卿先づ道行きぶりの出来事を聞かされよ、我れは卿が必らず不思議の事共に遇はれしを能く知るなり。そは此の道にて何事にも出遇はずと云はんは、それこそ却つて不思議の次第なるべければ。」

忠信、「さても卿は彼の沼に落ちられたるやう見受けらるれど、我身は幸ひに之れを脱かれ、無難に片折戸に達してけり。但し淫亂と呼べる者に邂逅ひ、殆ふくも身を過まらんとせしことあり。」

基、「卿其の女の網を脱かれしは實に仕合せなり。昔しヨセフも其の女に惱められしとき、彼れも卿の如く遁るゝには遁れたれど、其

の爲め殆ふく其の命をさへ失なはんとせしことあり。さるにても其の女は如何なることを爲つるぞや。」

忠信、「何にてもあれ意の望みは叶へんなど、さも言葉滑らかに云ひ寄りて、強て我れを連れ去らんとしてけり。其の軟やかに媚を遣る風情、かゝる者を見知れる人ならずば其の情は覺りがたからん。」

基、「さてく其の女の叶へんと云ふなるは、よも良心の願ひ事にはあらざるべし。」

忠信、「固より凡て情慾と肉の樂しみにてあるなり。」

基、「よくこそ彼の者を脱れは爲つれ、まことや『その口は深き坑なり、主に憎まるゝ者之れに陥いらん』と云はれてあり。」

忠信、「さり乍ら我身は全く其の女より遁れしや、將た遁れざりしや辨まへざるなり。」

基、「されど卿は必らず其の云ふ事には従がはざりしならん。」

箴言五ノ五

忠信、「元より身を汚されたるにはあらず、げに我れ古き書物を讀みたる事ありて、『淫婦の歩は陰府に赴むく』と云へりしを思ひ浮べたるなり。されば眼を閉ちて其の容貌に迷はされぬやう爲したりしに、女は忽ち我れを嘲み罵りたり、かくて漸やく其の處を過ぎ來れり」。

基、「其の他道中にて遇はれし難儀も無かりしや」。

忠信、「されば困難峠と呼ばれし山の麓に達せしとき、最とも年老いたる一個の人に出で遇ひしが、其人我身に向ひ、如何なる者にて那方に往くぞと尋ねしかば、我れは天の都に志ざす旅人なりと告げたるに、かの老人また言葉を繼ぎ、卿は正直なる者と見受けらる、さて卿に賃銀を取らすべきに、我が方に住ごまることを諾がはずやと云ふ。其時我れも其の名と其の住所を尋ねければ、老人答へて、其の名は始の人アダムにて欺惑の里に住む由を告ぐ。我れ又其仕事

哥林多前五ノ四

以弗所ノ二四、
提摩太前ノ二四、
二ノ一

約翰一ノ二六

は何にて、其の取らせんと云ふ賃銀は何なりやと問へば、其の業とするは諸般の快樂にて、また後ち遂に其の承業者と爲すべきこと、之れ其の賃銀なりと云ふ。我れ猶ほ之れに向ひて、其の暮し向きや他の奴僕等の事など尋ねけるに、老人は其の家が世の有らゆる甘き物美しくしき物にて充たされ居ること、並びに其の奴僕とても皆な其の産める者なりと答ふ。さらば幾干の小供をか持てるかと問へば、娘とては唯だ三人にて其の名は肉の慾、眼の慾、また世の誇と云ふなるが、所望とあらば嫁に取らせんと答ふ。其時我れ亦之れに向ひて、さらば何時まで我れを共に住はしめんと欲へるやと問ひけるに、そは老人が生きて在らん限りと打ち語れり」。

基、「さて其の結果は如何になり了ふせしにや」。

忠信、「さればなり、最初は其の云ふ處最と都合好き談なれば、聊さか心傾むきて寧そ此の人と共に往かんかとも思ひしことなるが、

不圖かく語りつゝ、其の額を見やれば、『其の行爲と共に舊人を脱ぎ棄つべし』と記されたるを我れ見てけり。

基、「さて其時何ぞか爲られし。」

忠信、「其時わが心焼かるゝ如く覺えて、此は必らず其の家に連れ行きたる上にて、我れを奴隸に賣らんとする者なるべく、其の云ふ處は如何に甘き談なりとも、其の誘ふ言葉は如何に巧みなりとも、中々油断すべきことかほと思ひしかば、直ちに老人に向ひて、我れは其の家の戸近くも行くまじければ、最早や談は無駄なるべしと云ひけるに、老人之れを聞きて忽ち我れを罵り辱かしめ、且つ我が後に左るべき者を尾けやりて、行く途すがら我が心に苦き目を見すべしと云へり。さる程に卒ざり行かんと振り回へりしが、その振り回へらんと身を轉らせし其の時、我が肉体は確と掴まれ、また恐ろしく引き戻さるゝやうの心地しけるに、さては我が身の半分は彼の

老人の手に引き取らるゝよと思ひて、覺えず悲しき聲を放ち、『あゝ、我れ惱める人なるかな』と叫びたり。かくても亦漸やく其の處を通り過ぎ、彼の峠には登れるなり。

さて其の時の半路も登りつると思ふ頃、我れ後ろの方を打ち眺めしに、誰れとも知らず風の如く疾く走る者の我れを追ふて馳せ來たるを見たりしが、やがて彼の休息所のある邊りにて其の者我れに追ひ着きたり。

其時基督信者言葉を來みて云へるやう、「其處なり、其處なり、我れ身は丁度其の處に憩ひしことなるが、寢穢なくも打ち眠りて懷中より此の巻物を失なひたり。」

忠信、「あゝ、良き兄弟よ、先づ先づ我が話を聞かれよ、さて、さる程に其の者我れに追ひ着き、突然我身を打ち倒せしかば、我れは氣を失なひて横たはれり。されど稍やありて些さか我が身に回へり

しとき、何故斯くは待らふにやと尋ねければ、其の者我れに向ひて、之れ汝が人知れず彼の始の人アダムに心を傾むけたる故なり、と云ひも果てず又もや烈しく我が胸を撃ちしかば、我れ仰面に打ち倒され、其の足元に横たはりて前の如くに氣を失なひたり。やがて又我れに回へりしとき、聲を揚げて其の慈悲を乞ひたりしに、其の者猶ほ我れに向ひて、汝の如き者には慈悲の顯はしやうも無し、と云ひつゝも亦再び我れを撃ち倒せり。かくては我れ終に此の者の手に果てんこと疑ひなしと思ふ折しも、彼の君出で來りて其の者を制し止めてけり。

基、「そは亦誰れ人なりしぞや」

忠信、「始めは誰れとも知らでありしが、其の通り行かるゝとき、其の手と脇に穴あるを見とめしかば、さては我が主にて在しけるよと合點したり、かくて愈よ峠に登れり」

基、「さて亦、卿に追ひ着きたる者こそモーセにてはあるなれ、彼れは其の律法を犯さん者を容赦することなく、また其の爲めに慈悲を見はすべき道をも辨まへざるなり」

忠信、「そは我身も最と能く知れり。抑も彼の者に邂逅ひしは初めてに非ず、我れ未だ平氣にて家に在りける頃、我が許に來りて、我れ若し彼處に留まらんには家ぐるみ焼き滅ぼすべしと告げたりしも、げに彼の者にてありけるなり」

基、「卿がモーセに出遇ひたる峠の側らにて、其の頂上に高殿の在るを見ざりけるにや」

忠信、「さなり、亦其の家の邊り近く二匹の獅子をも見てけるが、折しも正午の程なりければ、獅子は皆な眠りて在りと覺えたり。さて我が行程に日も猶ほ高かりし事なれば、彼の門衛が許に立ち寄りたる斗りにて、其のまゝ峠を下りてけり」

基、「げに、門衛は卿の通らるゝを見たりと告げしが、あゝ、彼の家を訪なはれなば好かりし者を、それこそ卿は一生忘れ難き種々の珍らしき物を見るべかりしなれ。それは儲て措き、謙遜の谷にては誰れにも出で遇ふことは無かりけるにや」。

忠信、「されば我れ不満足と云ふ仁に出會ひけるが、此の仁頼りに我れを説き勸めて再び連れ返へらんと爲たり。さても此の谷が全く人に譽められぬと云ふこと其の云ひ前にて、彼れは亦、是處に来ることには彼の傲慢、尊大、自惚、また榮耀榮華など云へる人々の最も憎む處なれば、我れ愈よ此の谷を渡るが如き愚か致さば、必らず多くの友達より厭しき不興を受くるなるべしと云へり」。

基、「卿は何と返答せられしぞや」。

忠信、「いかにも彼の人々は（元來肉躰の縁に繋がる者共なれば）正しく我が親身の問柄に相違なし、されど我れ既に旅人となりてよ

⑤ 續言
三ノ三十
全ノ十八
十二

り、彼の者共は我れを見離し我れも亦彼の者共を見棄てたれば、今は最早や縁も故りも無き者なりと答へてけり。且つ亦此の谷の事に就きては人々全く考へ違ひを爲し居れり。そは「謙遜は尊貴に先だつ」、とも、また「倨傲の心は墮落に先だつ」、とも之れある由を語りたり。されば亦言葉を進め、我れは彼の者の最も價値ありと慕へる者よりも、寧ろ賢き人の榮譽とする方を撰びて、此の谷を通り行くべしと告げたり」。

基、「其の谷にては他に何事にも遇はれざりしや」。

忠信、「されば我れ羞耻と云ふ者に會ひたり。さるにても我が道中出遇ひたる凡ての者の中に、此れほど持て餘したる者はあらずと思へり。他の者等は兎も角も事理を推して語りたる上は、其の云ふ處を否むことも出来たりしが、此の猛々しき羞耻ばかりには我身もホト／＼困じ果てたり」。

基、「さて、卿に何事をか云ひけるぞや」。

忠信、「何事とや、されば彼れは先づ宗教の道と云ふ其の道の事より苦情を云ひ立て、抑も宗教を心に守るなどは、人として憐れむべく賤しむべき下品の事なりと云へり。また氣立を優しくするは男らしからぬ事にて、其の言と行ひとにクヨクと意を用ゐ、慎しむ謹しみて我れと我が身を拘束り抑へ、其の爲め氣隨氣儘をも爲し得ざるごと、あばれ豪放不埒を好みとする當世の目より見れば、まことに嗤笑ふに堪へたる次第なりと云へり。彼れは亦苦情を並らべ、さても能ある者、富める者、また智慧ある者にして此の道に従がふ者は極はめて稀れに、且つや説き伏せられて馬鹿者となり、未だ誰れとて見し事もなき物を求むるとて、其の有てる物を悉皆く失はなんなど、求めて斯かる事を爲さんとする者あるべからずと云へり。彼れは猶ほも批難を並らべ、其の道に従がへる者の有様、別けても

●約翰七
八、四十
哥林多前
一、二十
六、十
全三ノ十
八、立比三
九、七、一

當時此の道の旅人が、見すばらしく賤しき姿にて在りつること、また其の人々等の無學文盲にて淺慕なりし事などを云へり。げに、斯かる調子にて其の他種々の事を並らべ立て、或ひは説教を聞きて泣きつ悲しみつする事は羞耻し、とか、或ひは呻めきつ、嘆息しつ説教より歸へることも羞耻しき事なりとか、さては人より取りたることありとて之れを償のひ返へさんとすることも亦羞耻し、とか、斯かることを云ひて我れを惱めたり。猶ほ亦、宗教の道のお蔭にて人は貴く富める者を疎み、卑く賤しき者を有り難がるなり、そは尊貴き人の僅かなる瑕瑾を見れば、直ちに好い加減の名を付けて悪しざまに云ひなし、また賤しき人々は同じ宗教の兄弟分なれば、論なく我が方に引き入るゝ故なり。いかに、之れこそ羞耻しき事にては有るまじきやと彼の者云へり。

基、「さて卿は何と云はれしぞや」。

忠信、「云ひたりとや、されば最初は云ふ事も云ひ得ざりしなり。げに、彼れ餘りに我れを逼めしかば、我が血しほは我が顔の面上り來れり、之れ彼の羞耻が起せし赤面にて、殆ふくも我れは其の爲めに敗けなんどせり。されど漸やくにして考へ出でしは、すべて人の崇ぶ所の者は神の前に惡まるゝ者なりと云へることなり。我れは亦彼の羞耻が世の人の事のみを云ひて、神と其の聖言に就きては何事をも語らざるを覺りたり。猶ほ亦審判の日到りて生死の決めらるゝは、至尊者の智慧と律法に依ることにて、世の豪族者の精神なごには依らざることをも考へたり。されば例へ世の凡ての人は之れに逆らふとも、我れは神の云ひ給ふ處を最も良とし、實に最も良しと考へたり。かくて神が此の道を選び給へるを思ひ、神が優しき氣立を好み給ふを思ひ、天國の爲めに自から愚を守る者は、却つて最も賢き者なるを思ひ、また世にて最も富み誇れる者のキリスト

を憎む者よりは、貧しくともキリストを愛する者の方遙かに勝れる事などを思ひて、さて、羞耻よ離れ去れ、汝は我が救はるゝ妨げなり、我れ若し我が主なる神に逆らひて汝を迎へんには、主の來り給はんとき我れ何の面目ありてか見えまつらん、げに我れ今主の道を耻ぢ、主の奴僕たるを耻とせば、我れいかで其の祝福を望み得べき。かく云ひて之れを擯ぞけんとしたりしが、然るにても左るにても彼の羞耻の猛々しさ、容易くは振り離さんことも叶はず、げに何時までも着き纏ひて道連れとなり、絶えず宗教の缺點を並らべ立て、我が耳元に囁やきたり。されど我れ終に之れに向ひて、其の輕蔑み侮ざる者こそ實に我が最も誇りとする處なれば、最早や如何やうに誘なふとも無駄なるべしと云ひ放ち、漸やくの事にして此の煩らはしき者を離れ得たり。かゝれば愈よ彼れを振り拂らひし時、我れは斯くこそ歌ひ出でたれ。

「さらば旅人目を醒ませ、

さらば旅人意して

ますらたけをの如くあれ、

仰ぐ天上は途遠く

急ぐ行程は夜近し、

肉の誘惑、世の迷ひ

三度び二た度び幾そ度び

重ねても身を圍みつゝ」

基、「あゝ兄弟よ、我れは卿が斯く勇ましく此の悪黨を退ぞけしを喜こぶなり。まこと卿の云はるゝ如く我身も是れ程の持て餘し者は無しと覺ゆ、げに彼奴の圖太さ、町中までも我等に付き添ひ來り、大勢の前にて我等に耻をかゝせなんとす、さらば夫れが爲めに我等善をも耻とするに至ることあり。其の身猛々しき者にあらずば、到底

底も彼奴の如く試ろみんとは爲さざるべし。さりとして亦、彼奴は唯だ愚かなる者のみ取り去りて、其の他の者には關はらぬ由なれば、其の圖太さは然もあらばあれ、我等猶ほ彼奴に敵對ふべきなり。宜なれや「智者は尊貴を得、愚かなる者は羞耻之れを取り去るべし」と昔しソロモンも云ひ置けり」

忠信、「あゝ羞耻に勝たんとならば、神に呼ばゝりて其の助けを求むる外なしと思ふなり。神は我等が此の世に在らんかぎり真理の爲めに剛勇かれと願ひ給ふべければ」

基、「卿の云はるゝ通りなり。さて其の他には彼の谷にて遇ひたる者も無かりしや」

忠信、「別に無し、我身は日のある間に彼の谷の残りも、亦次なる死の蔭の谷も無難に通り越したるなり」

基、「そは仕合せなり、我れは卿とは迢かに事變はれり、先づ彼の

谷に入るよりやがてアポリオンて彼の惡魔に出で遇ひ、久しき間
 恐ろしくも戦ひたりしが、思へば危ふかりし事共にて、別けても彼
 れに投げ付けられ、それに連れて手元より我が劔の離れ落ちたるに、
 彼れ叫びて汝が命は既に我が有なりと云ひしとき、又我れを組み敷
 きて微塵にも碎くる斗り歴し付けし時などは、我れは到底も其の手
 に殺さるゝならんと思ひける事なり。されど我れ神に呼ばりしか
 ば、神我れに聴き我れを我が凡ての難儀より救ひ出だし給へり。次
 に死の蔭の谷に入りしに、凡そ其の半路ばかりは光明と云ふ者絶え
 て無かりしかば、我れは亦幾度か是處に殺さるゝならんかと思へり。
 されど漸やくにして夜も明け日さへ昇りしかば、其の残りの途程は
 最と安らけく且つ静かに通り越したり。
 さて亦我れ夢の中に見けるに、斯く語りつゝ彼の兩人は進み行き
 しが、忠信不圖此の道の向ふ側を眺めやるごと、ゆくりなくも一個

の人の此の兩人に並び歩むを見出で、けり、是處は道幅いと廣かり
 ければ少し離れて並び行きけるなり。さて此の人は名を多辯と呼び、
 身の丈高き人なるが、さりどて近くよりは遠くにて見たる方稍や恰
 好よき男なり。されば忠信は此の男に向ひて斯く言葉を交はしたり。
 忠信、「友よ那方に往かるゝや、卿も天の國に赴むかるゝ處にや」。
 多辯、「まことに其の處に參る道なり」。
 忠信、「そは仕合せなり、然らば同道を願ふべし」。
 多辯、「それこそ此方より喜びて願ふ處なれ」。
 忠信、「さらば卒ぎ連れ立ち行かん、また有益なる事どもを語り合
 ひて旅の徒然をも晴らすべし」。
 多辯、「卿とにても誰れとにても、共に善事を語らんことは甚だ我
 が意に適ふ次第にて、我れは斯かる善き心掛けを持たるゝ方々に會
 ひたることを嬉しく思ふなり。げにや旅などに出でたるとき、斯く